

## 資料紹介 吉田如雪の明治一〇年日記について

木山貴満

### 吉田家資料と西南戦争日記について

吉田如雪正固は文化一四年（一八一七）、御擬作高百石取<sup>1</sup>の肥後藩士吉田家に生まれ、明治期にかけて活動した人物である<sup>2</sup>。幕末期の藩主細川慶順が「若殿様」の身であった頃から側周りを勤めはじめ、維新前後にかけては長崎のほか九州各地での情報収集・探索に従事した。維新までは「鳩太郎」を通称としていたが、明治二年（一八六九）に家督を息子隼之助へ譲ったあとは如雪<sup>3</sup>と名を改めた（以下、本稿では如雪と表記）。如雪はその生涯を通じて多くの記録を残している。特に日々の勤務についてまとめた日記類<sup>4</sup>は、当該期における若殿／藩主の日々の動静や江戸詰め藩士の職務について、その生活実態を含めて伺うことができる好資料である。

この吉田如雪に関する資料を中核とする吉田家資料は、同家御子孫の方より平成一四年（二〇〇二）に熊本博物館（以下、当館）へご寄贈いただいた。当該資料解題・目録については『館報二〇〇九年度報告』<sup>5</sup>をご参照いただきたい。

ところで、これまで西南戦争参加者の日記については政府軍側、薩軍側ともに一定数紹介されている。熊本に関係した代表的な日記を挙げてと次のようなものがある。

### 《政府軍側》

川口武定「従征日記<sup>6</sup>」：政府軍第一旅団会計部長。日記は戦争の翌年に刊行された。

喜多平四郎「征西従軍日誌<sup>7</sup>」：元川越藩士で警視庁巡査。熊本城籠城から鹿児島方面へ転戦。

甲斐有雄「明治十年日記<sup>8</sup>」：阿蘇高森出身の石工。軍夫として豊後日向鹿兒島まで従軍し、城山落城を見届ける。

### 《薩軍側（熊本隊）》

佐々友房「戦袍日記<sup>9</sup>」：熊本隊小隊長として参戦。田原坂戦後、宮崎方面まで転戦するも捕えられて入獄。

古閑俊雄「戦袍日記<sup>10</sup>」：熊本隊軍監。捕えられた後に広島監獄で日記を執筆。

安藤経俊「戦争概略晴雨日誌<sup>11</sup>」：阿蘇高森出身の神官。熊本隊に参加。

このほかにも薩軍参加兵士の日記は、鹿児島などを中心として数多い。しかし、西南戦争に関する未発見の日記資料が存在する可能性はまだ十分に考えられるだろう。すでに整理・紹介された資料でも、諸階層・諸人の日記については「明治一〇年」を一つのキーワードとし

て再検討する余地がある。本稿で紹介する吉田如雪日記も、こうした西南戦争関係日記発掘作業の一試行として位置付けたい。ちなみに当該日記は如雪の孫にあたる吉田純二氏によって「西南の役見聞録」としてまとめられたことがあるが、一般に頒布はされなかったものと思われる。資料の貴重性を鑑み、本稿において改めて内容の紹介・本文翻刻を行うこととした。

## 日記内容紹介

### 熊本城下の戦い

紙幅の都合上内容すべてを網羅することは叶わないが、西南戦争の初戦、熊本城下における戦いを中心として注目できる記述など、吉田如雪が記した明治一〇年日記を紹介する。なお、本稿で記す時日はすべて別掲翻刻文と対応する。併せて参照いただきたい。

まず、表紙見返しの部分には熊本城下における政府・薩両軍の砲台が列記されている。如雪は「砲台の」すべてを見ることはできなかった<sup>11</sup>旨を記しているが、これらの砲台は西南戦争翌年陸軍によって作成された「両軍配備図<sup>12</sup>」など他資料で裏付け可能である。ただし如雪は「千葉城上中学校（砲台尤力有り）」<sup>13</sup>※木山注・鍵括弧内の（ ）は原文割注書<sup>14</sup>や、「鶴林（我宅向フニテ三度処替へ、後片山屋敷内）」など、戦中の観察から得た情報も書き留めている。これらの生々しい情報は絵図等からのみでは得難い、「日記資料ならではの」貴重なものといえる。

当該日記本文は明治一〇年二月一七日付より起草されているが、同日条では薩軍軍勢が襲来するに至った事情が簡潔に書きとめられている。これは事前に得ていた情報のほか、「新堀」に掲示されていた報知文などを如雪がまとめたものだろう。早くも薩軍が水俣に到着したとの知らせに接し、熊本城下は避難者で混雑するなど翌一八日にかけて激しく動揺していた。

二月一九日、朝食を終えた如雪は京町濱田屋の湯へ向かう。入浴して間もなく、濱田屋亭主より火事だ、急いで出て見ろと声をかけられた如雪は裸体のまま三階へと駆け上がり、辰巳（南東）の方角に上がる黒煙を確認している。亭主は山崎方面だろうかと述べるが、如雪は「下ノ通丁ナルヘシ」と判じている（京町方面から南東とすれば如雪の見立てが正しいだろう）。二月の寒風に耐え兼ね再び湯に戻った如雪だったが、亭主が上げた「火事ハ御城ト云也」との大声に激しく狼狽した。楼上ではすっかり確認できず、如雪はとうとう湯を出て京町新堀橋際に位置した加藤社へと駆けた。ここで火事は熊本城本丸の東南隅に発するものと見えて、この余火が城下草場丁、水道丁へと飛び火している様子を記録している<sup>15</sup>。遂に九ツ時（午後一二時ころ）には天守閣に燃え移り、八ツ時（午後二時）にはただ天守台を残すのみとなってしまう。

如雪は「加藤清正公造築以来連綿トメ西国ノ名城ト称スル城、今日一炬ノ火ヲ以テ灰燼ニ属ス、加藤社ノ神慮如何ソヤ」と記している。当該日記全体を通して如雪がこれだけ自身の感想を書きつけている箇所はほとんどない。これまでに紹介された日記などでも語られるところだが、いかに当時熊本に暮らした人びとにとって天守閣焼失がショックな出来事であったかがうかがえる。

翌二〇日、如雪は戦乱を避けるため家財道具を川東村（現北区和泉町）の岩崎古平宅、西梶尾村へと移した。現代まで吉田家文書が遺されたのは、全くこのときの避難によるものだったのだろう。ただし、家内人数はその「要害」性を頼んで京町の居宅に残った。しかし、吉田家の判断とは裏腹に、翌二一日から京町を含む熊本城下は激しい戦鬪に巻き込まれることになるのである。

二月二一日、夜半に川尻を出発した薩軍は熊本城を包囲し、攻撃を開始した。西南戦争の初戦に位置付けられ、その後の戦況に重要な意味を持った、熊本城をめぐる戦いの開戦である。朝五時（午前八時）ころ朝食を摂りはじめた如雪であったが、食事を未だ終えないうちに砲声を間近く西南方角に聞いた。すぐに食事を終えて見晴しのよいところに登ると、段山に薩兵を、二丸細川旧邸（現在の刑部邸付近カ）に鎮台兵を見た。両軍は激しく砲戦を繰り返しており、間断なく続く砲声は豆を煎ったようだと如雪は評している<sup>14</sup>。そして、戦火によるものか、熊本城下の所々で火災が発生した。一方で京町では鎮台兵が米屋大助宅を初発として放火を行いはじめた。如雪が書き留めるところによれば、こうした鎮台の放火行為には城下民衆から怨嗟の聲が上がったようである。鎮台防衛の為とはいえ、こうした行為は民衆たちにとって許しがたい「暴挙」だったのであり、戦争に巻き込まれた住民たちのリアルな感情がここに表されているといえるだろう。薩兵が熊本城を四方から包囲したこと、鎮台兵が新堀（京町との境界線）と嶽丸（城内南東に位置する竹の丸）に地雷を設置したことも記されており、熊本城包囲戦はまさしくこの日からじまった。

翌二二日、昼頃京町宇土小路付近を歩いた如雪は、同地を陣地として押さえた薩軍兵士の軍装を観察している。すなわち、「羽釜帽子<sup>15</sup>」をかぶり、木綿織の綿入れを身に付け、紺色の股引き、草鞋に一刀差という出立であった。右腕に白の木綿裂が付けられており姓名が記されていたが、如雪はこれを袖印だろうと見ている。その他、全体として「簡易無造作」な装備だったようだ。如雪は「言語殊離一切不通人多シ」とも記しているが、彼らの会話を耳を傾けたのか、或いは薩兵と対話を試みたのかもしれない。二六日条の日記では聞こえてきた砲声について、薩兵が如雪へ「どこの場所だろうか」と尋ねてきている。如雪たちが留まっていた京町赤尾口付近は、四月上旬に熊本城包囲が解けるまで薩兵の守備範囲内にあり、包囲戦中はどうした接触が日常的にあったものと考えられる。ちなみに同日条（二六日）では鎮台兵五、六名が密かに京町本丁へとやってきて、小学校並びに個人屋敷へ放火したことが記録されている。この鎮台兵は放火の後に如雪屋敷へ立寄り水を求めてきたが、そのうちの一人は吉田家奉公人の常蔵が見知った者であった（宇土小路に居住し、饅頭や蕎麦を売って暮らしてい

た者らしい)。何故放火するのだ、との問いに、地元出身の鎮台兵は「家が燃えれば」大工や日雇いたちの飯のタネになるだろう」と言い残して去っていった。

二月二十八日、三月一日にかけて如雪のもとには続々と戦死者の報せが届いている。その多くは池辺吉十郎率いる熊本隊に参加し、高瀬方面の戦いで命を落とした者たちだったようだ。その後も相次いだ戦死者（三月五日条、一七日条、一八日条ほかに記述あり）は京町の往生院に埋葬されている。往生院及び同寺に隣接する光永寺が薩軍に一時占領されていたことも関係したものでろうか。また、三月七日には再び薩兵が如雪宅を訪れ、雨戸を貸してくれと乞うてきた。奉公人が迷惑の由を述べると薩兵は諾して立ち去ったものの、薩軍は如雪宅の間近くに大砲二門を据え付けた。如雪は薩兵にその進退を尋ねるものの、応対した薩兵は砲戦の危険性を述べて吉田家に避難を勧告するのみであった。これを受けて如雪は家内の者とともに池亀村（京町より西北）への避難を決するものの、朝食を未だ終えないうちに砲戦が始まってしまう。これには吉田家の皆が驚き、必要最低限な道具のみを携え、砲弾が飛び交うなか懸命に「池上<sup>16</sup>村」（池亀村）用掛・池永太七宅へ避難した。自宅周辺は「要害」であると信じていたものの、この日より如雪たち一家は避難生活を余儀なくされた。

三月一三日、如雪は一昨日（一二日）より熊本隊が各村に「鎮撫隊」を設置したことを書きとめている。如雪が避難した池亀村・柿原村には二〇名の熊本隊士が詰めしたが、これは一二ヶ村（周辺の村々だろうか）が金穀を出し合って維持することになった。熊本城戦の開戦後、戸坂・古町・京町などの商家に無頼の徒が押入り、略奪・殺人などの狼藉行為が激増した故の措置であった。これとともに「臨機之所置」を行う旨が正・副戸長の名で掲示されている。県庁移転など行政機能が混乱・麻痺した状況下にあつて、この判断は戸長ら在地行政主導層が独自に下したものだつたのかもしれない。しかし、客観的には熊本隊（薩軍）の指揮下に入ることを意味するのであり、後日政府軍より嫌疑をかけられかねない危うい決断でもあつた。前日一二日条に引き続き、同日条では熊本城西方の段山をめぐる激戦<sup>17</sup>も記録されているが、敗退した薩兵が牧崎村辺を放火したこと、勢いづいた鎮台兵によって池亀・柿原両村の米穀が奪取されることを恐れた鎮撫兵（熊本隊士）のことが記されている。鎮撫兵は両村の民衆を率いて村内の米穀を四〇俵ほど収容する。鎮台から撃ち出される砲弾のなか、怯え惑う村人たちは鎮撫兵に督責され、命懸けでこの作業に従事した。皮肉なことに池亀・柿原両村はこの一事により、政府軍からすると「薩軍方」に属した観をなお増してしまうことになる。

三月一八日午後、本宅が荒れているとの噂を聞いた如雪は、数人で確認に赴いた。すると本宅は家中の床板まで剥ぎ取られ、門扉から雨戸、障子、塀など板木類は全て奪われた、見るも無残な姿に変わり果てていた。三月七日条で薩兵が「雨戸を貸せ」と尋ねてきたことからすると、恐らく薩軍陣地等で使用するため持ち去られたものだろう。そんな如雪宅へ薩兵二人がやってきて、煎瓶で何やら染物をはじめ。二

人に「この家の主人か」と尋ねられた如雪は「忸怩<sup>じくじ</sup>」たる思いのなか、「そうだ」と回答している。如雪ら吉田家の面々が避難したことにより、薩兵は思うがまま必要とする木板類を同宅より奪い取ったのだらう。とうとう吉田家家屋それ自体が戦争被害に遭ってしまったのである。如雪たちは箆筒に残ったわずかな道具を運びだすのがやっとであった。

三月一九日から二〇日にかけて田原坂方面の戦報が如雪のもとへ届いている。一九日は薩軍方で戦った熊本士族戦死の報、二〇日は田原坂において薩軍敗退との報であった。報せの通り、三月二〇日午前六時ころより政府軍は田原坂に猛砲撃を加え、総攻撃を行っている。これにより薩軍は敗退し、一七昼夜に亘った田原坂の戦いは終局を迎えている。翌二二日条の日記では植木鐙田周辺に屯集していた政府軍（およそ三〇〇名）に薩兵が切り込みをかけ、そのほとんどを討ち取つたらしいとの風聞が書きつけられている。「今日見タル人」の話では現場の屍は一二〇体にも及んだとされているが、これは鐙田向坂で起こった戦闘と合致している。すなわち、植木方面を確保した政府軍が熊本鎮台との合流を目指して南下していたところに、薩軍貴島清・中島健彦らが敗兵收容のうえ狭路で攻撃を加えたものである<sup>18</sup>。

田原坂方面での戦況は薩軍が防衛線を再構築したこともあつて、三月末まで両軍一進一退という状況にあつた。しかし、当該地域での薩軍兵力消耗を反映したものが、如雪日記三月二二日条では「薩兵植木ニ行タリトテ市中甚寂寥タリ」と記されている。薩軍は主力を植木・田原坂方面へと移動させた結果、熊本城包囲策をいわゆる長圍策（水攻めを行い、城をわずかな兵力でゆるやかに包囲）に転換させたが、如雪の日記記述はこれを裏付けるものだらう。翌二三日条でも熊本城攻守戦が休戦にでもなったようだと言す一方で、植木田原坂方面で砲声が間断なく続いていることが記されている。二四日には川東へ赴き、如雪は「西郷・桐野・篠原ヨリ諸方へ届書」及び中原尚雄ら口供書<sup>19</sup>、有栖川熾仁親王より発された「討薩檄文」を見た。さらに二五日には如雪は古閑村に「大里隼」（旧知二〇〇石・大里隼之助カ）を尋ね、三弦同門の長須（長洲村カ）於タツに対面すると、「其喜ヒ甚シ」と如雪はこれをととても喜んでいいる。この日も熊本城下では両軍の戦闘が起こらず、束の間の平穩のなか如雪たちは自宅の片づけを行った。

しかし、三月二六日、短い平穩は鎮台兵による薩軍包囲突破の試みによって破られる。砲声が「東西南北一同」に激しいと如雪は記しており、熊本城周囲各所で射撃戦が起こったものと見られる。さらにこの戦闘により、如雪らの目前で傷つく者まで出た。如雪ら家族が身を寄せていた池亀村用掛役宅に人足が集まっていたところ（鎮撫兵Ⅱ熊本隊によって集められていたものか？）、庭内で立ち話をしていた者の足に流れ弾が当たってしまったのである。他の者が病院に背負っていき弾丸を抜いてもらい、命に別状はなかったものの、井芹村でも中島太郎という者の妻が負傷したという。結局両軍の勝敗はつかず、夜に入って戦闘は治まったものの、如雪らの自宅付近である京町赤尾口辺や宇土小路辺は終日燃えていた。翌二七日、自宅と「牧柴宅」の境界に薩軍番兵が一〇人ほどやってきたので、これ以後鎮台兵による放火

を恐れる必要が無くなったとして薩兵に「ウバ貝」を贈っている。しかし、この二日後（二九日）、薩兵が再び如雪宅の雨戸を奪っていったことが明らかとなる。薩軍の番兵は確かに火事を防いでくれたものの、個人宅から畳など建具を勝手に持つていくことは以前と変わらなかった。二七日条の日記から四月二日条にかけて、薩軍による水攻めの話題も散見される。「昨日（木山注・二六日）比ヨリ石塘下祇園ノ際ヲ磧ヲ置テ小川ヲ塞ク」（二七日条）、「水次第二増シ今日段山田面茶麦不見、一面水ニ浸ルト云」（二九日条）、「午後稗田二行、寺原田畠過半水ニ浸リ、洗濯場上ニ積ミタル諸道具、大船ノ水ニ浮ミタルニ似タリ」（三〇日条）、「水ハ増湛ヘ井芹ノ田ニ入ル」（四月二日条）と低地から浸水していった様子が刻々と記されている。現在西南戦争時に撮影されたと見られる古写真で、北岡付近や本妙寺付近の浸水風景写真を見ることができ、恐らく如雪もこうした光景を目の当たりにしたのだろう。

京町付近では鎮台軍と薩軍両軍が一町程隔てて台場を築いてにらみ合い（四月四日条）、障害物となる家屋は放火によつて焼かれた（同日条）。そうしたなか、四月八日午前四時ころ、鎮台兵が安巳橋周辺の薩軍包囲へ奇襲をかけ、遂にこれを突破した。これら突圍隊はそのまま水前寺へ健軍方面へと急進し、隈庄（熊本市南区城南町）にて衝背軍（八代二見に上陸し、北上して薩軍後方へ進撃）と連絡を取ることに成功する。如雪も四月八日・九日条の日記でこの戦闘に触れており、その勝敗は未詳としながらも「城中此日廿日程粟ノミ喰タリト話」という熊本城内の窮状について情報を入手していたようだ。また、九日条の最後で如雪は「城中ニハ太鼓ニテ歌ヲ歌フヲ聞ク」と記している。この日、突圍隊の援護で出撃した鎮台兵が久品寺村で備蓄米二七〇俵を入手し、城内へ運び込んだ。このため城内は「欣喜踊躍」したとの記録<sup>20</sup>があり、如雪が聞いた「歌」はまさしくこのときのものであったのかもしれない。

#### 熊本城下の戦いのあとで

熊本鎮台と衝背軍の連絡成功、更には衝背軍の熊本接近により熊本城下をめぐる戦況は大きく変わろうとしていた。そして四月二二日午後、衝背軍のうち山川浩中佐率いる選抜隊が長六橋を渡り、熊本城内の鎮台軍と接触する。二ヶ月近くに渡った薩軍による熊本城包囲が遂に崩れたのである。熊本北方に展開していた薩軍も撤退を開始し、その後戦況は城東会戦・日向・薩摩への薩軍転戦と刻々変化していく。

四月一五日条の日記において如雪はこうした戦況の転換を記録している。彼が記すところでは夕方七ツ時（午後四時ころ）に薩軍大敗。敗れた薩兵たちは木山・矢部方面へと撤退を開始する。「是ヨリ日向二行ナルヘシ」と如雪は見ているが、まさしくその通りとなった。さらに同日如雪は政府軍と鎮台兵の合流も目撃している。双方が喜び合うのを見ながら如雪は京町薩軍台場へと赴く。大砲などは一切引き揚げられて影もなかったが、同台場で如雪はボロボロになった自身秘蔵の謄本を見出し、さらに自宅のものと見覚ええる戸板・畳も拾った。

翌一六日には植木・田原坂方面を制して南下してきた政府軍が、京町本庁を通過するのを目撃している。同日には戦火によって物的・人的被害を被った者に対する救済策などが掲示された。掲示には「賊踪跡ヲ知りタル者、訴へ出ルニ於テハ賞聴等ヲ与フヘシ」とも張り出された。

一七日、木山方面に大砲の音が頻りに聞こえるなか、如雪は昨日熊本入りした政府軍が大挙転出し、城下にはわずか十分の一度になつたと記している。如雪も日記に記している通り、薩軍を追つて戦地に進軍したものでろう。ようやく戦火による混乱も遠ざかるかと思われた一八日、本宅へ向かった如雪は戦時下特有の理不尽な仕打ちに再び遭遇してしまふ。即ち、政府軍兵士が如雪宅へやつてきて突如植木鉢を壊し、壁を破つて「赤尾口の者はみんな薩軍に与したと聞いている。この家にも薩軍が宿していた痕跡がある」と脅してきたのだ。奉公人の常蔵が懸命に弁解し、「当代当主（木山注：如雪の長男・泰造）は小学校の教員です。第一人<sup>21</sup>は東京へ学問に行つており、もう一人<sup>22</sup>は西京へ行つております。この家からは一人も戦に出ておりません。」と兵士に訴えた。しかし、兵士はこれを了せず、家に火をかけようとした。常蔵も打つ手なしと諦めかけたが、結局兵士は放火することなく引き揚げていった。京町付近一帯は薩軍陣地となつたことで、熊本鎮台は同地域住民を「敵方」とみなしたのかもしれない。

熊本平野の東南から御船方面にかけて城東会戦と呼ばれる一大野戦が行われた翌日四月二二日条において、如雪は京町一帯におけるある変化を記録している。即ち、出町往生院に「征討軍輜重本部」の張札が掛けられ、塩屋（詳細不明。商家カ）には「旅団糧食本部」、池田村内藤宅には「福岡縣監獄」の張り紙が為されたのである。これらの施設接収は、京町周辺（熊本城の北方）が政府軍管理下に再び収まったことを象徴する一事といえよう。熊本城下から戦場が次第に離れていくことで、如雪ら住民の生活も徐々に平穏を取り戻しはじめる。

四月二六日、如雪は一ヶ月以上避難していた池亀村より本宅へと引き上げる。宅内は戦禍によつて未だ根太床、畳も無い有り様だったが、ともかく無事に帰宅することができた。熊本城下に大きな被害をもたらした熊本城をめぐる戦いも、如雪にとってはこの日が一つの区切りになつたといえるだろう。

如雪は熊本旧士族の動静や薩軍方へ従軍した者に関する情報などを逐一書き止めつつ、その後も日記を書き綴つていく。如雪の視線は熊本市中の様子、家族血縁者の動静、その後の戦争の推移などに注がれ、日記内容には興味深い点が多々ある。しかし、本稿では一先ず熊本城下の戦いの終了を以て筆を措くこととする。最後に、西南戦争自体の終結を如雪はどのように日記に記したのだろうか。左の通りである。

九月二五日、如雪は貼紙掲示によつて「昨廿四日午前三時、各旅団鹿兒島城山へ進撃、賊魁西郷隆盛、桐野利秋等ヲ打取、其他賊徒打死又ハ降伏シ、全ク平定候段鹿兒島縣権令ヨリ通知有之云々」との報知に接した。如雪自身はもちろん、如雪たちが暮らす熊本城下の地に物心ともに大きな被害を与えた西南戦争が終結したのである。それまでの日記記述とほぼ同じく、如雪は感想を交えず淡々と事実を記すのみ

である。しかし、「古演武場」（本庄カ）へ赴き酒を買い求めている。どのような心情であったか推し量ることは難しいが、戦争終結を記念して杯を揚げたのは確かだろう。

そして一〇月二〇日、開戦当初より薩軍方へ身を投じ、長らく行方不明となっていた親戚の三郎七が帰宅。この記述を最後として当該年の日記記録は閉じられている。その消息について気を揉んでいたであろう如雪にとつて、親戚・吉田三郎七の無事な帰還が真の西南戦争終結を意味したのだろうか。

ところで、日記末部には明治一〇年中における家族・親族の動静が簡単にまとめられている。本旨からはやや外れるが、如雪は吉田家で飼っていた猫の「由幾」についても記述していることが注目される。「由幾」が同年中に子猫を出産した旨を記しているのだが、如雪は吉田家の構成員として「由幾」を捉えていたのだろうか。明治時代初期における家族観の一端がうかがえるようで興味深い。

1 もともと吉田家は百石取であったが、理由は不明ながら如雪祖父鉄之允の代において御擬作高百石に改められた。その後、如雪の代において知行百石は地面に復している。

2 吉田如雪（鳩太郎）略歴については拙稿「吉田家文書 上京公私諸控」（『熊本博物館館報26 二〇一三年度報告』、二〇一四年）を参照いただきたい。

3 ちなみに、「如雪」の名は吉田家第六代目喜左衛門が用いたことがある。

4 現在吉田家資料中には主題となる明治一〇年日記のほか、嘉永四年（一八五二）、万延元年（一八六〇）、万延二年（一八六一）、慶応三年（一八六七）一八六八）、明治三年（一八七〇）の日記がある。

5 大浪和弥「熊本博物館所蔵の吉田家文書」（『熊本博物館館報22 二〇〇九年度報告』、二〇一〇年）

6 川口武定『従西日記』（青潮社、一九八八年復刻）

7 佐々木克監修・喜多平四郎著『征西従軍日誌―一巡査の西南戦争』（講談社学術文庫、二〇〇一年）

8 熊本県企画振興部文化企画課『ふたつの明治十年日記 神官・石工が記した西南戦争』（熊本県企画振興部文化企画課博物館プロジェクト班、二〇一一年）

9 佐々友房『戦袍日記』（青潮社、一九八六年）

10 古閑俊雄『戦袍日記』（青潮社、一九八六年）

11 甲斐利雄編・安藤経俊著『一神官の西南戦争従軍記―安藤経俊著「戦争概略晴雨日誌」』（熊本出版文化会館、二〇〇七年）

12 両軍配備図（当館蔵、熊本城顕彰会寄託）。明治一二年制作。

13 城下戦に先立っていわゆる「射界の清掃」が行われているが、当該日記ではこれと城下の火事との関係については記述なし。

14 ただし、このとき如雪は鎮台兵が大砲も使用しているのに対し、薩軍は小銃のみであるとも観察している。

15 詳細不明。形状が羽釜に似た陣笠、訓練笠の類かと思われる。

16 如雪は日記中で「池上村」と表記しているが、地理的にも日記中の表現的にもこれは池亀村を指していると判断できる。以下、本稿では池亀村と表す。

17 三月一二日夕方には段山をめぐる激しい戦闘が起こり、鎮台軍が段山陣地を確保したが二二一名もの死傷者を出した。熊本城包囲戦中、最大の戦闘となった。（落合弘樹『西南戦争と西郷隆盛』、吉川弘文館、二〇一三年）

18 前掲『西南戦争と西郷隆盛』、一八八頁。

19 大警視川路利良らの命により中原らが西郷暗殺を謀ったとして鹿児島私学校の面々はこれに激昂し、私学校党蜂起理由の一つとなった。

20 前掲喜多平四郎『征西従軍日誌』

21 如雪二男・吉田義静。明治一〇年当時は東京司法省法律学校に在籍。

22 如雪三男・吉田作弥。明治一〇年当時は京都で英語を学んでいた。

【資料翻刻】

吉田如雪 明治十年日記（吉田家文書）

翻刻凡例

- ・適宜句読点を付した。
- ・（ ）内は原文の割注書を示す。
- ・原文「○」などの記号はそのまま表現した。
- ・改行は原文に基づいた。

（表紙）

「明治十丁丑年二月十七日ヨリ

日記

吉田氏」

（表紙見返）

「熊本城砲台

（砲台尤力有り

一 埋御門 一 二丸御屋敷跡 一 千葉城上中学校

後

一 瀬戸坂上松野巨屋敷跡 一 南大手上

其外数多有之と雖悉見ざる也

賊軍砲台

一 鶴林（我宅向フニテ三度処替へ、後片山屋敷内） 一 四方池

一 花岡山（阿蘇殿松の上墓所） 一 長六橋際

其外数多有之といへとも悉見ず」

記二月十七日 晴

鹿児島県下一般人気不穩、銃刀

ヲ帶シ所々ニ屯集シ声言メ云、將ニ上京

訟ル事アリト、其子細ハ鹿児島県下ニテ

刺客廿七名ヲ捕得タリ、是ヲ糺問スルニ島

津久光并当公且ツ前參議西郷何某、

篠原以下数人ヲ殺シ得ルニ至ラハ賞金

何千圓ヲ与フヘシトノ三條実美公以下

參議中連署之書札ヲ出シタルヨリ人

心沸騰、此挙ニ及フト云、餘波我縣ニ

連リ廢刀廢祿ヲ憤ルノ縣士千名餘

相煽動シ九州ノ騷動甚シ、今日新堀ニ

揭示シテ云鹿児島兵隊今日水俣ニ

到着ノ報知アリ、因テ縣官出張ノ応

接ニ及フ筈ニ付人々不驚様、若心接<sup>マ</sup>不

不調節ハ猶揭示スト云、今日ヨリ市中

資財ヲ運送シ縣下動搖營ナラス

同十八日 晴

今日モ亦昨日ノ如ク市中荷車人力車東  
西ニ馳セ、老若乱ヲ避ル者近在ヲ望ンテ出ツ、  
鹿兒島ノ宿陣役今日河尻ニ至ルト云

同十九日 晴

朝飯後四時過京町濱田屋ノ湯ニ行ク、然  
トモ戸ヲ閉テ寂然タリ、亭主云湯ハ有リ入浴  
セヨト、則湯ニ浴メ直ニ亭主云、火事アリ急ニ  
出テ見ヨ、予裸體ノ俛三階ニ上リ見之ニ辰  
巳ノ方向ニ当ツテ黒烟冲天、亭主云山崎  
ナルカ、予云然ラス下ノ通丁方角ナルヘシト、  
然メ寒風猛烈裸躰ニ堪ヘス又入浴ス、  
既ニメ亭主大声予ヲ呼テ云、火事ハ御  
城ト云也、予狼狽、楼ニ上ツテ見ルト  
雖確定ヲ見ヘズ、則出テ加藤社ニ到ル、  
城中東南ノ隅(本丸ナリ)天守際マテ火焰  
天ヲ突ク、今日西北ノ風烈敷、飛火草場  
丁、水道丁辺ニ吹落シテ所々火ヲ発ス、其  
勢ヒ慘然トメ消防ノ人ナク、只火勢ニ任ス、  
遂ニ九時比ヨリ天守ニ火懸リ八時ニ至リ  
只天守臺ヲ見ルノミ、加藤清正公造築  
以来連綿トメ西国ノ名城ト称スル城、今日

一炬ノ火ヲ以テ灰燼ニ属ス、加藤社ノ神  
慮如何ソヤ、本丸一字モ残サス独リ宇土櫓  
ノミ祝融ヲ免ル、今日鹿兒島征討ノ勅旨  
鎮台ニ下ル

同廿日 晴

今日家財ヲ五町川東村岩崎古平ト  
西梶尾村不浄取丈平并弁慶下懸屋  
敷ニ送ル、尤家内ハ奔走セス要害ノ宜シ  
ニ安メ猶本宅ニ在リ、今夕薩兵川尻ニ着

同廿一日 晴

朝五時比餐ヲ喰フ、央ニ至ラス砲声西南ニ  
当ツテ聞フ甚タ近シ、忽ニ飯ヲ畢リ小高キ所ニ  
登リ見ルニ段山ニ薩兵アリ、二丸旧邸ニ鎮兵  
アリテ砲声交発ス、真ニ豆ヲ熬ルニ似タリ、  
鎮兵ニハ大砲アリ薩ニハ小銃ノミ、此砲戦少  
モ休マス廿四日ニ至ル、其内熊本所々火ヲ  
発ス、暫クモ絶ヘス、今京町米屋大助宅ヲ  
以テ臺兵放火ノ初トス、是ニヨツテ人多  
ク臺兵ノ暴挙ヲ怨ム、薩兵城ノ四方  
ヲ囲ム、新堀ト嶽丸ニ地雷ヲ埋ト云、但臺  
兵ノ要心ノ由

同廿二日 晴

砲声暫モ止ズ、薩ニハ大砲未來ト云、予今夜ヨリ雨奇晴好樓ニ宿ス、昼内宇土小路本丁辺徘徊、藤崎長瀬川一等ト薩兵ノ軍容ヲ見ル、兵士一対皆羽釜帽子ヲ着、木綿織リノ綿入紺ノ股引草鞋一刀ヲ帶シ、右ノ腕ニ白ノ木綿裂ニ姓名ヲ記シタルハ袖印ナルベシ、素足ナルモ有リ、総テ簡易無造作ニテ多クハ郷兵ナルヘシ、言語殊離、一切不通人多シ

同廿三日 晴

今曉七時比ヨリ砲声甚シ、予起テ前岡ニ上リ望ニ二丸邸ヨリ大小砲連発、薩ハ祇園山段山ヨリ射発ス、薩砲昨夕着ト云、大砲ノ破裂ハ火ヲ帶テ空中ニ交発シ、小銃ハ下ニ鳴ル、誠ニ天地鳴動トモ謂ヘシ、今曉ヨリ熊本士族ノ兵薩ニ応援ス、其巨擘ハ宮川工馬・芦村加・和田金・佐野亥・菅七其他多人数ナリ、山内又・吉田三モ其中ニ在リ

同廿四日 晴

同廿五日 晴

山東清武所持スル旧知事様ノ御直書ノ写ヲ拝見ス、其大意ニ曰ク去年熊本県下暴動ニ因ツテ百名余罪名ニ陥ル、憫然ニタヘス、此度又鹿兒島騷擾当縣ニ波及シテ種々ノ訛伝モ有之様子ニテ若誤ツテ縣士之ニ応シ又々罪名ニ陥ル事アラハ旧君臣ノ情誼甚タ之ヲ憐ム、因ツテ休焉・樂山等ヨリ之ヲ諭シテ過チナカラシメヨ  
○近日攻守共砲声間遠ナリ○鹿兒島縣士叛跡顯然ニ付征討仰付ラル、トノ揭示有之、野津少將陸軍大将トメ高瀬ニ下ル

同廿六日 晴

今朝飯後戌亥ノ方ニ当ツテ砲声豆ヲ熬ルカ如ク聞ク、薩人問云何ノ地ナルヘシヤ、予答云高瀬ノ方角ナルヘシ、併シ甚近ク聞フ、大概三里ノ直径ナルヘシ、恐クハ伊倉木留等ノ高原ナルカ、午時比砲声止ム○今日モ又所々徘徊シテ軍容ヲ見ル○今朝臺兵五、六人竊ニ來ツテ本丁ノ小学校并若林長平屋敷ノ長屋ヲ焼テ出ル、帰途我屋敷ニ來リ水ヲ呑ム、僕常蔵知リタル兵アリ、宇土小路ニ住シテ温ドン蕎麦ヲ売リタル者

ナリ、問云何故ニ火ヲ放ツヤ、兵答云是大工  
日雇ノ虫養ニナルベシト、遂ニ牧柴カ屋  
敷ヲ通り抜、鎮宮ニ向ツテ去ル

同廿七日 晴

今朝飯後瀬川一ヲ請シ風呂ニ入ル、濁酒等  
ヲ出ス

同廿八日 晴

近日愈砲声止ミ世間甚静カナリ、近来  
植木ノ向坂本丁ノ小学校ノ小戦アリ○今夜  
五半時比三郎助ト藤崎弥三歸り来リテ、  
又四郎去ル廿六日高瀬寺田村ニテ戦死ノ  
事ヲ報ス、初縣士千人計薩兵ト共ニ官兵  
ト戦ハント高瀬ノ方ニ向ツテ進ム、官兵薩  
ノ袖印ヲ付ケ同指揮旗ヲ振り我縣士ヲ  
靡キ進マシム、然レ官兵少々遙ニ向フニ見エ  
我士是ヲ侮リ進ム、豈圖ンヤ、伏兵左右ヨリ  
引包ミ之ヲ射撃ス、是ニヨツテ縣士死スル者  
廿六名ト云、手負モ又不寡、又四郎ハ左ノ驕ヲ  
打レ、泚モ遁レ難ト思ヒ脇差ヲ抜テ咽ヲ突ク、  
然レ共猶死セサル故近ク在ル所ノ池邊源太郎  
ヲ招キ、首ヲ討テ呉ヨト手様スルユヘ池辺、伊藤

軍平カ脇差ヲ以テ介錯スト云、其死尸ヲ  
見ルニ額ニ大ナル疵アリ、斬リ口白ク血ヲ見ズ、  
恐ラク絶脈後ノ疵ナルベシ、其餘同時ノ  
死尸皆死後ノ疵ト火事焼タル者多シ、  
其残酷甚シト云ヘシ○今夜ヨリ二泊、藤崎弥  
三モ同様也

三月一日 晴

山内又四郎ヲ往生院ニ仮葬ス、其同日死者左ノ如

- 一 松岡多平 一 松岡元武
- 一 雨森糟一 一 原田古平
- 一 伊藤勝義 一 林 弾八
- 一 山内又四郎 一 田辺哲生
- 一 竹崎平太 一 今池経太
- 一 名前不知 一 名前不知
- 一 志垣文蔵

右ノ外悉不記、此日一宮義平、築山伊平行  
方不知、恐ラク戦死ナルヘシ、此日ノ死尸多ク火ニテ  
焼キタル故面貌不知人多シ、志垣モ後日ニ  
其文蔵ナルヲ知ル○今夜藤崎ト磯谷司馬助、  
三郎助泊ル、一家人数廿三人雑沓究ル、夜四半  
時松女子ヲ産ム、産婆頗ル勇氣アリ九時比雨  
ヲ凌キ蘿林ノ墓間ヲ経テ無人ノ池田村ヨリ

稗田ニ帰ル、僕等ハ恐レテ此人ヲ送り不肯

同二日 雨晴風

今日於千代・於越・於久米・於国・於住、弘生村ニ移ル、人力車一輛三里半ノ所百三十目、貞雄ハ昨日周雄一同弘生ニ行ク

同三日 晴

熊本城攻守共休戦ノ如シ、砲声殆ト絶ルニ似リ

同四日 昨夜ヨリ雨、今夕霰

於巖・子供下女四人川東ニ移ル○攻守猶昨日ノ如シ、高瀬木葉ニ当ツテ砲声絶ル時ナシ

同五日 微雨

往生院ニ行ク、宮川貞衛・磯谷司馬雄来リ、加藤何某ト其弟ヲ葬ラントスルニ逢云フ、一昨三日円臺寺村懸リ字耳取坂ニテ戦死スト云、井原何某モ同日死スト云テ疾ク葬リ畢リタリ○今日壽妙院様御征月ニ付茶ヲ入、牡丹餅ヲ拵ヘ遥拝ス

同六日 晴

今夜半ヨリ鶴ノ山蔭ニ当ツテ人声騒シク、大勢往來スル形氣アリ、下々ヲ戒メ家内早ク寝テ夜ノ明ルヲ待ツ

同七日 晴

払曉薩兵来ツテ雨戸ヲ貸セト云、下僕迷惑ノ情ヲ述フ、兵諾シテ去ル、然ルニ鶴ノ阪上ノ畑ニ臺ヲ構ヘ大砲二門ヲ据ル、因ツテ薩兵ニ問フテ其進退ヲ謀ル、兵云此家土堤ヲ隔テ危キ事ナシト雖若破裂来ツテ人ヲ傷ン事ヲ恐ル、願クハ他ニ行テ難ヲ避ン事ヲ、則朝飯ヲ促シ速ニ池亀ニ往ントス、飯未央砲玉屋上ヲ過テ弁慶ニ落テ破裂シ、一ツハ前ノ田中ニ墜ツ、衆皆愕然速ニ子供病人ヲ走ラセ、其餘ハ要用ノ雑具ヲ携ヘ奔リ出、前後砲玉乱墜ス、其都度々々頭ヲ伏スノミ、池上村用掛池永太七宅ニ寓ス、此日砲戦午時ニ止ム

同八日 晴

朝ヨリ夜ニ至ル迄無事、砲声高瀬木葉ノ方位ニ当ツテ休時ナシ

同九日 晴

午後立田ニ往キ御子様方御安否ヲ伺ハントス、同所御門前ニテ井上半蔵ニ遇フ、云此所ニハ御子様方不在、大津郷錦野村赤星某ノ宅ニ乱ヲ避玉フト、不得止只御廟ヲ拝シテ帰

同十日 雨

雨中砲声モ亦休ム、閑散無聊

同十一日 雨止風寒

於タツト鹿ト川東ニ行ク○今日午後砲声甚シ、暫時ニ止ム

同十二日 寒風

今日時々大小砲声アリト雖モ甚稀ナリ、夕方北段山ニ宿陣スル薩兵ヲ、鎮兵片山・島両邸ノ裏ヨリ忍ヒ出討之、両兵死傷アリト云、遂ニ薩兵井芹川ニ退キ川塘ヨリ砲戦ス、夜ニ入鎮兵北段山ニ火ヲ放ツテ去ル、同時京町焼ク、佛巖寺并柳川丁ト云○薩陣ヨリ使ヲ城中ニ遣ル、旗ヲ建テ山崎口ニ入ル、臺兵之ヲ伴フテ内ニ入ル、此使菊池産ノ者、官兵ノ郷導セシヲ蒲生捕テ已ニ殺サントス、因請フテ何ソ一役ヲ勤メ死ニ就ント、因テ此使ヲ命

スト云、年五十余ノ平民ナリ

同十三日 雨

一昨日比ヨリ村々ニ鎮撫兵ヲ熊本隊ヨリ置也、池上柿原村等ハ二十名、西浦流藻安野某大矢野仙之助等巨擘ナリ、十二ヶ村ヨリ金穀ヲ出シテ養之、池上村ニ宿ス、初戸坂ノ武助古町田辺屋、京町ノ茶屋米屋伊勢屋等ニ無頼ノ匪徒来ツテ金穀ヲ奪ヒ人ヲ殺シ狼藉甚シ、依之テ此挙アリト云、且揭示シテ臨機ノ所置スヘキ由正副戸長ヨリ示ス○段山新八幡ニ薩ノ陣所アリ、二丸邸ト相向ツテ此度攻城第一ノ要害トス、砲戦始終此台場ニアリ、此日臺兵竊ニ来テ薩兵ノ怠リヲ伺急ニ襲ツテ奪之、薩モ川塘ヲ伝ヒ援ケ来リ、臺兵ト相唐突之川ヲ隔テ、戦フ、薩敗レテ祇山ニ走ル、死傷捕縛甚し、臺兵薩兵ヲ嘲ツ曰玉ヲ与ヘン歟焰硝ヲ与ヘン歟、薩兵呼曰勿嘲駕籠鳥臺兵又呼曰兵糧可支三年、砲戦至暮休ム○薩兵段山ヲ退テ牧崎村辺放火アリ、臺兵村ノ米穀ヲ奪ハン事ヲ畏レ鎮撫兵夜柿原池上両村ノ民ヲ率ヒテ米ヲ取入ル、稍

四十俵程ヲ得ルト云、此夜雨降り風寒シ、況  
臺兵ノ砲彈時々民人ノ頭上ニ墜ツ、故ニ屢  
奔潰スルヲ鎮撫兵督責シ、曉ニ至ツテ終ル

同十四日 晴風

寺原ノ小兒昨日ヨリ胎毒ニ困ム、則同夕家入  
三益ニ診察ヲ頼ミ葉ヲ請フ、夜ニ入テ稍声  
ヲ出シ色ヲ復ス、因ツテ僕ヲ弘生村ニ遣リ報知  
シ、且松カ同所ヘ移ル遅延スル事ヲ述フ○夕  
方赤尾口ニ火アリ、遠見碇ナラズト雖恐ラク緒方幸  
カ宅ナラン歟○夜我池上ノ寓ニ雜賀寅彦来リ  
云、田原ヨリ春日ノ本營ニ行ク路ナリト、彼地戰  
争ノ跡ヲ聞ニ今日ト去月廿七日甚苦戰也ト、  
然ルニ官軍甚強シト云

同十五日 晴

弘曉本妙寺方丈中教院庫裏焼失并  
内膳トノ沼田トノ等焼ルト唱フレ共詳ナラズ、  
是臺兵ノ焼ク所ナリ○昨朝池田新屋敷  
原田鹿西隣并今少シ西段下ノ島ニ薩兵  
砲臺ヲ築ク、都合鶴林ト四ヶ所也○河内ノ  
報ヲ聞クニ官艦數艘碇泊シ、時々小舟ニ大砲  
ヲ載セ来リ、寺或ハ蔵ヲ目当ニ放射ス、因ツ

テ塩屋舟津大ニ乱ル、薩ノ番兵二百許大砲  
ナキヲ以テ其上岸ヲ待テ敢テ不出ト云

同十六日 曇夜雨

今朝松母子ヲ送ツテ於タツ・於菊弘生ニ行ク、  
松ハ馬ニ乗セテ遣ル○夕方牧崎内膳トノ蓄積  
ノ米ヲ臺兵取也、薩兵支ヘ来ルト雖井芹  
村ニ潜ミテ敢テ不出、甚畏ル、ノ跡ナリ○夕方  
鮮鯛一尾ヲ求メテ味噌汁ニメ豆腐ヲ加ヘ、宿主ト  
藤右衛門等十五人計ニ贈ル、何トモ大ニ喜フ

同十七日 晴

昨夜半鯨波ノ声ヲ発シ小銃大砲ノ音頻ニ  
聞フ、新堀又ハ埋門辺ト覺フ、今日人ニ問フニ不  
知ト云○高瀬田原辺ノ砲声昨夜ヨリ今日モ  
不堪聞、死亡互ニ多数也ト云、今日往生院ニテ昨  
十六日田原戰死ノ墓一ツ有リ、姓名ヲ忘ル

同十八日 晴暖

植野安氣カ寓居ノ中尾ヲ訪フ、是ニモ娘来  
リテ去ル十三日出産スト、則同病我ト相憐○  
午後本邸ノ住居散乱ノ風説アリ、則一兩  
人ヲ率ヒ行テ見ルニ家中床板迄剥取り、門

ヲ初雨戸障子塀等板ノ類悉ク奪去、薩  
ノ二人来リテ煎瓶ニテ何カ染居タリ、予ニ此  
家ノ主人ナリヤト問、然リト答ルニ忸怩タリ、  
則箆箆ニ其餘少々ノ道具ヲ與出セリ、  
其中ニ破裂頭上ニ鳴ル、仍テ速ニ奔リ出

同十九日 晴夜雨

昨夜田原ニテ夜討ニ切り入シ人数ノ内、余  
田新助・藤本吉子・中路新二男・松岡多平  
二男討死シタル由、同日同所ニテ戦死ノ楯岡  
小七郎、同七本ニテ戦死ノ船津東平ヲ埋葬  
シタル往生院ノ墓所ヲ拝ス○今日モ本邸ノ道  
具ヲ池上ニ運フ、藤右衛門ヲ雇フ、賃錢二十錢  
○夕庄村市郎翁、同村ニ来リ寓スルヲ訪フ○泰  
造今日ヨリ弘生ニ行ク○昨夜半ヨリ田原ノ砲声  
聞ヘズ、薩ノ玉葉尽タリト云

同廿日 雨夕晴

今朝田原ノ薩軍破レ官兵押来ルトテ大ニ混  
雑ス、後委ク之ヲ聞クニ官兵田原ノ間道ヨリ  
植木ト鹿子木ノ間ニ出、佐土原兵ト小戦シ遂  
ニ植木薩ノ賄所ヲ焼テ去ル○阿蘇ニ重ノ  
薩兵破レ、大津ニ退キ黒川ニテモ一戦アリ

シト、且山東清武戦死ノ話有リ、何レモ未  
確○芦北比奈久ニ官兵上陸シ、河尻ニモ一  
戦有リシト云

同廿一日 曉風雨後ヨナ降ル

昨朝植木辺ニ襲来ノ官兵三百許鑑田・  
糸山辺ノ谷ニ潜リタルヲ薩ノ兵切り入、大略  
尽シタリト云、今日見タル人ノ話ニ全ク百廿人ハ  
死尸アリタリ、此戦ニ緒方夫門手負タリト云○  
植野安氣来リ暫閑話ス、茶餅等ヲ出ス

同廿二日 晴夜雨

於タツ・於菊、弘生ヨリ帰ル○寺原米一俵  
藤右衛門ニ売ル、代三百目○今日宇土小路辺  
徘徊ス、笠力家焼失、大里モ同様、出町ニ  
行ク、薩兵植木ニ行タリトテ市中甚寂寥  
タリ○今日官兵弘生辺ニ来リ、薩兵モ隈府ニ  
行タリ、一両日内ニ必戦アラン事ヲ知ベシ

同廿三日 晴夜雨

熊本城攻守共休戦ノ如シ、只北方植木田原  
ニ当ツテ砲声休ム時ナシ、或話ニ隈府山鹿ノ  
薩兵走り、八代ハ官兵走りタリト、今植木ハ北

ノ町外ニ官兵アリ、市中高瀬山鹿追分ニ薩兵アリ、田原ノ營ト連接ス

大小砲声徹曉鳴醒風涙雨兩軍情

不知兄弟今存否曳杖又登一古城

同廿四日 晴夜雨

川東ニ行午飯ヲ畢リ立福寺横田克矣

宅寓居ノ笠婦潜ヲ訪フニ、菊池ニ転寓

セシトテ不逢、横田清馬ト談話ス、薩ノ西

郷・桐野・篠原ヨリ諸方へ届書并中原尚

雄以下廿七名ノ口供ヲ見ル、又有栖川親王ノ

討薩檄文アリ○帰途藤崎長ヲ訪フ、不圖

瀬川一二逢テ暫ク談話ス○今朝ヲギ迫ニ

テ接戦アリ、二百名計リ薩ヨリ討取リタ

リト云、手負ノ往来スル、陸続不絶大凡四

十人餘也○途中口號一首

去歲中村觀戲場今年立福觀軍粧

両觀皆從茲路過人世變遷似電光

同廿五日 雨後風

五丁古閑村ニテ大里隼ヲ訪フ、菊三弦ノ師匠ト

同門ノ長須於タツニ対面ス、其喜ヒ甚シ、今日

攻守共甚無事、本宅ニテ取残ノ雜具ヲ拾フ

○昨日玖摩ノ人数薩應援ノ軍ヲ見ル、粧頗ル美、槍ヲ持セ若党僕ノ連人アリ

同廿六日 寒風雪

曉ヨリ城兵討ツテ出、東西南北一同ニ攻守ノ

砲声響ク事甚シ、我寓用掛ノ役宅ナルヲ以

人足集リタル内、一人庭内ニ立談スルモノニ砲玉中

リ足ヲ疵ク、則病院ニ負ヒ行玉ヲ抜ク、命分ニ

障リナシ、井芹村ニテ中島太郎妻モ傷クト云、

流矢藏ニ中リ家屋ニ落ツ、凡八、九、此日兩軍

勝敗ナシ、夜ニ入テ軍ヲ収ム、夕方吉田少・三浦等

ノ家焼失ス、其餘赤尾口辺本丁宇土小路方

終日焼ク、今日薩ノ死亡二名、傷十名余、官兵

ハ五百ノ死傷ト云トモ甚不審

同廿七日 晴寒

午後瀬川・藤崎来ル、一酌ヲ催ス、日入ニ帰ル

○薩ノ番兵、牧柴ト我境ニ袋丁ニ来ル、十人程、

是ヨリ官兵ノ放火ヲ憂ヘズ、因テ番兵ニウバ貝ヲ

熬テ贈ル○昨日比ヨリ石塘下祇園ノ際ヲ磧

ヲ置テ小川ヲ塞ク

同廿八日 晴

藤崎・入江八助同道ニテ北迫ヨリ兩軍ノ戰爭  
ヲ見ル、官兵ハ吉次・那智山ノ南面ニアツテ植木ニ  
止ル、薩兵ハ木留本村辺ヨリヲキ迫・投刀塚・植木  
町ノ松原ニ止ル、我等三名杵築宮ノ西ニ島ノ畔ニ  
腰カケ握リ飯ヲ使フ、央ニ至リ銃玉其島ノ  
中ニ落ル、藤崎奔リ行其玉ヲ掘レトモ不得、  
然ルニ此辺婦女等玉堀ニ来リ、我等ヨリ進事  
二丁余、多キ者十斤ニ至ル、本陣ニ売ルニ拾  
八匁ト云（一斤代九錢也）其餘所々徘徊ス、今日至テ  
平穩

同廿九日 雨

忠右衛門弘生ヨリ来リ云、小児廿三日ニ死シ  
同所混雜ニテ鹿ノ水ニ移ルト、今日米二俵代  
六百十五匁ヲ遣ル○水次第二増シ今日段山  
田面茶麦不見、一面水ニ浸ルト云○牛ヲ以テ  
疊建具ヲ取ル、昨日薩夫来ツテ又雨戸等ヲ  
取以ヲ也、番兵火ヲ防ケ共疊等ヲ取ル事元ノ如シ

同三十日 晴

午後稗田ニ行寺原田島過半水ニ浸リ洗  
濯場上ニ積ミタル諸道具大船ノ水ニ浮ミタル  
ニ似タリ、松野亘庭前ニ官兵ノ砲台アツテ頻ニ

壺井方ヲ放射ス○今日モ本宅ノ道具ヲ取ル  
去ル廿一日ヲ脱シ廿三日ヲ廿二日ト認ム、因テ  
三十一日ハ三十日也、夫ヨリ前ニ繰ルヘシ  
四月一日 晴  
於イツ来リテ飯畢リ本宅見物ニ行時ニ  
大津ヨリ泰造カ使リ彼所ヘ来ラン事ヲ請フ、  
依テ明日ヨリ常蔵ヲ添テ送ル○山崎平太・  
植野安氣来ル

同二日 雨

雨天ニ依テ於イツ大津行ヲ止○熊本城攻守  
共静穩、水ハ増湛ヘ井芹ノ田ニ入ル、木留ノ方  
官軍勝利ニテ邊田野村ニ進ミ薩ハ松ノ本  
ヨリ南ニ退ク、且宇土八代官兵迫リ来リ薩川  
尻ノ病院百軒余ナリシヲ甲佐御船ニ移シ、玉  
薬ハ釈迦院嶽ヲ越シテ運ヒ、或ハ日向ヨリ  
高千穂ヲ越シ来ル由○岩崎物部、徳王村ニ  
テ薩兵ニ縛セテ於久保小屋ニ囚ト成リタル説ア  
リ○庄村翁来ル

同三日 晴

朝早天松野亘宅辺四、五軒焼タリト云、焰烟

甚熾ナリ、薩ノ放火ニヨルト云不審、夕方ニ至リ之ヲ糺スニ建町辺ト云○忠右衛門来リ弘生辺両軍相對シテ未進撃セスト云○近日村々ノ夫役繁多ニシテ池亀ノ小村ニメ一日七名程日々泊リニテ出ル、其上夫役死亡相接リ因ツテ民間ノ疾苦愁声聞ニ不堪

同四日 晴 旧二月廿一日

寺原平太郎カ家宅今朝焼失ス、初メ田上路ニ於タツニ逢ヒ、其話アリ、因テ稗田ニ行テ之ヲ望ムニ真也、纔ニ餘烟ト裏門ノ戸板ヲ見ル、忠エ門今朝飯後弘生ニ帰ル、必此景況ヲ報知スヘシ、其無念推テ知ヘシ○官兵本丁磯谷・津田ノ四ツ角ニ台場ヲ築ク、薩ハ葛西・中村ノ四ツ角ニ築ク、相去ル一丁程ナリ○出町薩ノ駈引ニ障ルヲ以近日放火セントス、因テ久屋ヨリ中汲ヲ売リ出ス、一升代八匁、ナヲ五本程ノ醸造アリ、未醸スニ至ラス、実共ニ売ル、味噌モ五十本ノ桶アリタルヲ薩軍用ニ充ルト云フヲ以不得止之ヲ出スト、亭主下女鹿ニ語ツテ其有餘ノ家用ニ供スルナキヲ嘆ス

同五日 晴暖

今朝ヨリ隈府辺砲声夥シト云、昨日薩ノ斥候雜賀云、官兵太郎兵エ渡リ二千餘ノ屯アリ、其外三十丁安宅辺官兵アリト、昨日二丁方ノ官兵敗走セリト云○大里瀬川中路新来○常蔵荷物ヲ昨日大津ニ送ツテ今夕帰り来ル、彼地方平穩也ト云

同六日 晴

大里隼来ル、師匠於タツ同道夕飯并茶餅等ヲ出ス、大里云土州兵ト見ヘ昨日赤帯ヲメ多人数中尾下官尾ヲ通リタルヲ実弟梅原丹見タリト云、近日土長薩ノ援兵トメ来リ、肥筑も同ク出兵セリト、因ツテ南関ニ在ル官軍ノ本陣ヲ高瀬ニ移セリト○旧知事公見今大島黒田カ宅ニ在スト云、休焉方溝口三五陪従ス

同七日 雨

今日河尻ノ方角ニ当大小砲ノ声頻リニ聞フ、木留ハ官兵吉次ノ山際ニ退キ薩ハ萬樂寺ノ山ニアリ、砲戦日夜休マス○柿原ニテ不圖金沢辺ノ寓ニ到ル、田代雄ノ後家モ在リ

同八日 雨

払曉鎮台兵討出タリトテ城ノ四方大砲ハ雷  
鳴ノ如ク、小銃ハ豆ヲ熬ルニ似タリ、東方ハ烟焰天  
ニ沖ル、是白川向新屋敷久品寺辺ト云、此方  
臺兵尤進テ砂取近方ニ到ルト、京町ハ磯谷  
角ノ台場ヨリ出ル事能ハス、夕五時ニ至リ砲  
止ム、今日モ勝敗ナシト見ユル、死傷ハ官軍  
尤夥シト云未詳○熊本隊斥候ト見ユル人  
ニ池上原ニテ逢、今日熊本ノ砲声ニ依テ来ル  
ト、熊本隊当時本陣冬門寺村ニ在リト、近  
日ハ此隊戦争ナシト語ル

同九日 雨

昨日未明ニ城中ヨリ討出タル兵隊ノ内三百五十  
名、各砲器ヲ携ヘ刀ヲ帶シ久品寺村ニテ米十六俵  
奪取り百姓ニ馬ニ負セ、砂取ヨリ御船ニ去リケル故  
薩兵追討ニ出タレ共、其討得タルヤ勝敗等  
未詳、此兵久品寺村ト水前寺元御茶屋ニ  
放火シ去ル、兵隊砂取ノ者アリ、父兄ヨリ強テ留ム  
ト雖モ今夜再来ルヘシト云テ去ル、兵皆草鞋  
餅タバコヲ買テ行ク、城中此日廿日程粟ノミ喰  
タリト話、此戦ニ出町口ニテ薩一人戦死、夫卒二人同ク  
死シ、井芹ノ原ニテ熊本兵一人、外二人井芹ニテ死タ  
リト云○今日攻守甚無事、時々砲声アリ城中

ニハ太鼓ニテ歌ヲ歌フヲ聞ク

同十日 雨

相宿ノ善兵エト亭主ノ二子九エ門ト北迫辺ニ砲  
玉ヲ求ニ行、六十八斤ヲ買来ル、一斤十八匁玉一ツ  
九分也、是ヲ本陣ニ売ルニ一斤廿目ニナル、北迫  
方角家毎ニ各玉ヲ堀リテ意外ノ金ヲ得ル、故二人々  
却テ乱ニヨツテ富ヲ致ス者アリ、然ルニ昨日ユ  
ノ木ト云村ノ子供十三ニナル者、玉掘ニ行流矢ニ  
中リ死シタルトテ葬礼アリタルヲ見タルト、  
猶人ノ懲リサルヲ恐ル

同十一日 晴

今日モ無事攻守并木留方共時々用心砲ヲ聞  
ノミ、昨夜ハ木留方大ニ砲戦アリテ両軍死傷モ  
有リシヨシ○藤右衛門ニ米二俵ヲ遣ル、代二百七十  
目

同十二日 晴

山崎平太宅江行、午後山崎平庄村長翁  
来リ、明日糧米願ヲ区长江出サントス案  
文○証「一 米二俵」右者今度變動ニ依テ  
糧米差支取続兼候ニ付被渡下受取候

也「家祿八十二俵」「何大区何小区當時何大区何小区何村何某宅寄留」「何ノ誰

同十三日 晴

今朝庄村・山崎・金沢辺・田代武熊願書一同差出ス、則扶助米二俵完相渡ス之切符来ル○金沢話由良勅兵エ・奥村軍記等四、五人朝廷ノ御趣意ヲ伺ヒ薩ニ同力ノ決定セント大阪ニ至ルトコロ捕縛セラレタリト○植野ニ行、又緒方夫門カ手負ヒタルヲ訪○今朝本丁台場ニテ夫卒三人砲玉ヲ拾ヒニ外ニ出タルユヘ直ニ官軍ノ台場ヨリ二発ヲ放チ各二人傷ヲ蒙ル、此夫井口カラ川ノ者也、人々以愚ノ極トス○於キク昨夕ヨリ熱氣甚タ強ク今日尤甚シ、依テ柿原医江藤元真ニ来診ヲ頼ト雖立福寺本陣ニ行タリトテ不来

同十四日 陰夕雨

今朝医者江藤来ル、診察云恐ラク庖瘡ノ序ナルベシト、則湯薬ヲ与フ、今日熱氣少ク退ク○金沢ト僕二人森何某ヲ連テ世安木村半平宅ニテ御扶助米ヲ受取、折節河尻口破

タリトテ焰烟天ニ上リ、薩兵連臺寺渡リヨリ二本木ニ来リ同所本陣辺ヨリハ白川ヲ越テ木山方ヘ走り、老若ハ資財ヲ負テ祇園山ヲ登リ遁ル、混雜実ニ甚シ、祇山ヨリ望ニ東ハ沼山津方ニ砲声甚繁シ、南ハ川尻辺放火アリ、又西ハ松尾ト金峯山ノ谷合ニ煙リ見ユル、是モ兵燹ニテハナキヤト考ルノミ、今夜大江村辺火光アリ、鎮兵討出タリト云

同十五日 晴

四ツ時柿原ノ湯ニ入り帰途金沢寓ニ行キ、昨日米運送ノ礼物拾五匁ヲ同人ニ頼ム、但一俵ノ割合ニテ一俵半ノ代也○途中ニテ河豚ヲ求メ得タリ、午飯ニ常藏・チモヲ呼テ料理ス○夕方七ツ時薩兵大ニ敗レ東方竜田山方ヨリ木山矢部ノ方ヘ引ク、是ヨリ日向ニ行ナルヘシ、其内後レタルモノト見ヘ一小隊程池亀ヨリ本妙寺江引タル兵アリ、其餘兵卒東西ニ奔走シ、出町ヨリ官兵入り来リ臺兵迎之、双方喜可知ナリ、日暮臺兵ニ鐘太鼓ノ音アルヲ聞ク、予鶴ノ臺場ヲ按行ス、大砲ヲ初一物ノ捨タルヲ見ズ、只空營ニ桜花ヲ挟ミ書

籍等ノ散乱セル在リ、其内予秘蔵ノ謡本  
六・七冊ノ反故同様ニ成リタルヲ拾得タリ、且又  
戸板畳ノ覚アル物ヲ拾得タリ

同十六日 晴

昨夜猫ノ塔ニテ近衛兵ノ通行ニ不意ニ斬懸  
一人ニ手負セタリ、兵士追駈タルニ五人ナリシ  
カ遂ニ見失ヒタリ、今日本丁出町ヲ官軍  
ノ通りタル幾万ナルヲ知ス、草鞋ノ千足バカリ  
ヲ荷ヒタル夫卒百五十人ハ現ニ見タリ、其他  
押テ知ベシ○出町紙屋市木屋等昨夕焼タリ、  
今日同町ニ分取ノ品アリ、白熊附ノ槍七、八本ト  
具足彈藥等ナリ○掲示一兵燹ニ罹ル者、  
家居破毀ニ逢タルモノ目下凍餒ノ者  
一 誤テ銃丸ニ中リ刀鎗ニ触ル者、右急  
調ノ上出張所ヘ可申出、一 賊踪跡ヲ知り  
タル者訴ヘ出ルニ於テハ賞懸等ヲ与フヘシ○  
於キク病氣ノトコロ懸リ医行方不相分ニ付、今  
日田中半随ニ転シ頼ム○長迫ニテ西浦季四  
郎、田屋誠弟狩野ノ養子ト縛セラレテ  
官兵ニ引ル、ヲ見ル

同十七日 雨 △

植野ヲ訪ヒ季四郎カ縛セラレタルヲ尋、又且三郎  
七カ家出達ノ事ヲ議ス○藤崎・船津・牧柴ノ家  
族ニ新屋敷ノ家ヲ貸ス、又本邸ヲ片付テ近々  
帰住ノ心組ヲナス○忠エ門弘生ヨリ来リ泊ル、  
寺原ノ道具片付ノ為ナリ○木山方ニ当リ  
烟リ天ヲ焦、且大砲ノ音頻リ也、出町ニ行ク、  
市中昨日ノ兵士悉ク去ツテ十ノ一計リ残リタリ、察  
スルニ戦地ニ繰出シタルカ、熊本隊ハ悉皆東方ニ  
行タル由○上村隠居兄弟来ル

同十八日 晴

新邸ニ藤崎ヲ訪フ、午後本宅ニ行ク、官  
軍来ツテ鉢植ヲ破リ壁ヲ毀ツ云、赤尾口ハ  
悉ク賊ニ党スト聞ク、依テ此家ニモ賊ノ宿  
シタル跡アリト、常蔵種々弁解シ当代ハ  
小学校ノ教員也、弟一人ハ東京ニ学問ニ  
行キ、一人ハ西京ヘ行タリ、此家ヨリ一人モ軍ニ  
不出ト、官軍不肯家ニ火ヲ放タントス、僕  
可施術ナシ、然レ共火ヲ放タスシテ去ル○  
左平次来リ河豚ヲ料理ス、藤崎モ亦来  
日暮ニ散ス、左平次云岩崎加熊カ連累ニテ  
サツノ本陣ニ引レ縛セラレシカトモ無事ニ帰リタ  
リ、且蒲池軍太戦死、和田金ハ中戻シ大木

戸長縛セラレタリト云○新邸ニテ市村漸ニ  
逢フ、芦村英五郎戦死ノ話アリ○今夜ヨリ  
風邪且疝ニテ大ニ苦ム

同十九日 晴

病ニヨツテ終日平臥ス、忠右エ門来、弘生ヨリ  
来ル○本邸ノカケ樋ヲ営ム、又大豆小豆ヲ  
植フ○西浦流藻縛ニ就キ横田清馬家  
ヲ焼ル、尔後縛セララル

同二十日 晴

病ニヨツテ平臥ス、藤崎来ル○佐平次話、神足  
勘十郎本妙寺本堂焼亡ノ日戦死スト○  
昨日官軍少シク利ヲ失ヒ薩兵勢ヒニ乗ル、因  
ツテ熊本ノ官兵甚減シ今日新鍋竜田山辺ニ  
砲聞フ昼後寂然タリ

同廿一日 晴

薩兵大津町ヨリ南白川ヲ越シ木山戸川  
中無田飯田山辺ニ連リ、官軍竹迫戸嶋健宮  
東辺ニアリ、今日モ両軍砲声ヲ聞ズ、総督ノ宮ハ  
熊本城中ニ本営ヲ居ラル、出町往生院「征  
討軍輜重本部ノ張札アリ、塩屋ニ「旅団

糧食本部ノ張紙アリ、池田内藤宅ニ「福岡  
縣鑑獄ノ張紙アリ○周雄・忠エ門来リ山内  
一家賊ノ党タルヲ以テ弘生村ニ置事ヲ憚ル、因ツ  
テ明日熊本ニ歸リ来ルノ報アリ、兩人今夜より  
池上寓ニ泊ス

同二十二日 晴

藤崎長新邸ヨリ其本邸ニ歸ル、於エツ  
於ナツ於クニ於クメ弘生ヨリ新邸ニ来ル、吾  
寓池上ニテ夕飯ヲ出ス○今日モ両軍鬪トメ  
砲声ナシ○旧知事公北岡邸ニ在ス、一昨二  
十日比高瀬ヨリ御着ト云

同廿三日 晴

周雄カ交リ片山緒方清橋瓜来ル○官軍  
飯田山ヨリ以北木山ノ方モ山ニ登リ連綿一里半  
程ノ篝火アリ、今夜木原山モ火アリ○薩兵  
ノ内五十名程自刃スト官兵語ル○中村政云三  
郎七ニマ水ニテ逢、病院ニ医ヲ尋ヌト、藤崎弥三  
松浦等四五人同道セシヲ藤掛新七郎モ見タリ  
是ヨリ日向ニ行ト云シ由

同廿四日

於ナツ、於クニ、周雄、忠エ弘生ニ帰ル○又四郎  
戦死、三郎七脱走ノ届書ヲ出ス○中村才馬  
舅横田又作、木山ニテ官兵ノ道案内セシト  
云ヲ以テ薩兵ニ殺サル、今日ヨリ七日前ト云

同廿五日 雨

終日ノ降続キニテ甚無聊

同廿六日 雨

池上村ヨリ本邸ニ帰ル、未座敷二間根太床モ  
ナク、四畳二夕間モ床ナシ、七畳半ノ部屋モ根太ナ  
シ、仍テ其分ハ畳ヲキ先膝ヲ容ル、ノミ

同廿七日 雨

強雨ニテ所々屋漏ル、出町ノ湯ニ行夫卒入重り  
屈ミナリ難キ程ニテ板敷モ下駄ニテ歩ム、夫ヨリ京  
町ヲ通り加藤社ニ至、社中一字ヲ不残、只瓦礫ア  
ルノミ、帰途本丁ノ角ニテ堀井弥傳ニ逢フ、立談ニテ  
木村男吏、都甲カ消息ヲ聞ク

同廿八日 晴

周雄、於松、於住弘生ヨリ来ル、座敷ヲ  
貸クレヨト云、仍テ床敷居ヲ構ヘテ住ミ候ハ、

可貸渡ト約ス、此夜ヨリ三人ニ泊シテ帰ル

同廿九日 晴

森本儀十郎、柴鹿夫婦来リ一泊ス、泰  
造無異ノ報アリ

同三十日 晴夜雨

葉藍十俵ヲ寐ス○津ノ浦ニ行キ歛ヲ頼ム  
○藤崎宅ニテ河豚ノ料理アリ、中路新、瀬川、我  
ナリ○大矢野次郎八、国友半ト矢部行アリ○  
氏家甚木山辺ニテ薩兵ニ刃セラル、旧臣モ死亡  
アリ、芦村加毛傷ヲ負フト云○周雄等帰ル

五月一日 雨夕晴

川東ノ品物ヲ取ル○

同二日 晴

泰造大津ヨリ帰り森本義治来リ泊ス

同三日 晴夜雨

報恩寺、法蓮寺ノ墓所ヲ檢スルニ皆平安也  
寺者両方共焼ク○坪井ヨリ迎町新町段  
山辺ヲ見物ス○合志弾外一人自首ト相見、迎町

ヨリ入来リ、村松丈ニ逢タルト云○伊良子軍十郎  
大津外牧ニテ炮刑ニ逢タルト云、佐野亥一郎モ大津  
ニテ官兵ニ殺サレタリト○建部左エ門、宮部一右エ門  
捕縛セラル、此面々人ヲ殺ス事七人ト云

同四日 雨夜雷鳴

周雄来ル○益茂風呂ニ浴ス○牛肉ヲ求ム代一斤  
十五錢、本丁小学校屠牛場トナル

同五日 強雨出水

池上村寄留所池永多七へ越後縞帷子一反并  
キリコノ盃臺ト獵刀一本ヲ謝礼トシ贈ル、同ク  
藤エ門ニ硯ヅタ二枚、盃臺引盃等ヲ贈ル

同六日 晴

常蔵ニ木綿単一、金一円、鹿ニ岸縞ノ  
小袖一ヲ遣ル、此度ノ變動ニ誠実ニ励精セシ  
ヲ褒メテ也

同七日 晴

寺原全家新邸ニ来ル○喜太郎、村松来ル  
○原田鹿蔵長子戦死ノ話ヲキク

同八日 晴

植野安氣来、笠カ姫ニ逢フ、慎三郎大分縣  
拜命セシト云、笠今鹿子木中尾本村半三郎  
宅ニアリ○出町女湯始ル、益モ風呂湯錢百  
文味噌一斤七匁新酒廿二匁○常蔵ヲ大津  
ニ遣リ、於イツ等ヲ迎ヘシム、鶴雄煩ヒ且馬ヲ  
雇得スシテ遂ニ不帰、今日常ザフ薩賊三名ト  
夫卒五人ト縛ル熊本ニ行クヲ見ル、内一人ハ赤尾口  
辺ニ徘徊セシ者ニテ紺屋ニテ竊ニ染物ナトセシ者  
ト云

同九日 晴夕雷雨

今日始末書ヲ警視分署エ出ス、出町妙教寺也  
二月十五日以後ノ履歷書也○京町方間ニ弟<sup>ゴッ</sup>  
店ヲ開キ商人仮ニ歸住ス、鱸ヤモアリ

同十日 晴夕雷雨

昨夜ヨリ風氣ニテ終日平臥ス○近日官軍ノ  
玉葉ヲ大津ヨリ迎町ニ送ル、馬一疋一円完、今日マ  
テ五六日、因ツテ馬ヲ雇フ事ヲ得ス

同十一日 晴

於イツ、鶴雄等四人大津ヨリ帰ル○蚊屋ノ質  
受ス

同十二日 晴夜雷雨

藤崎長宅ニテ蛸ノ馳走アリ○官兵一人来  
リ話ス、鳥取縣ノ産ナリト云○予風邪清解

同十三日 雨夕晴

於ヤへ来ル○国武弘来ル○途ニテ大矢野  
次郎八ニ逢フ、昨夜人吉ヨリ帰ルト云、御内使  
者ノ意ヲ縣士ニ伝ヘタル迄ナリ、然直ニ引返シ自  
首ノ処置ニハ運ヒ兼ルト云、縣士三四日以前延岡  
鹿兒島方々ニ出張ノ跡ナリ、池辺軍等モ面会  
スト云、御船ハ大分ノ苦戦ニテ縣士五十名ホト死亡  
スト、薩ハ甚勢ヒヨク、是ヨリ本戦争ノ形氣有  
リ、流言ノ熊本士ト不和ナトモ無キ事ニテ宮川  
工馬死亡モ跡ナシト云、併何モ秘事ナリト語○  
巷語ニ東北菊池ノ方ニ当リ砲声アリ、且二大隊  
ホド出兵ト云、甚不審ナリ

同十四日 雨

閑散無聊建町ノ湯ニ入り、新邸等ニ行ク

同十五日 雨

周雄話ニ平野云鹿兒島ハ農商共ニ抗敵スル  
故悉ク打殺スト云、城下ハ一円ニ焼ク、島津父  
子ハ桜島ニ退キ愈恭順、砲玉ハ官軍ヨリ海ニ  
沈メシカ、共二人吉ニ送ルモノ千駄程也、官軍三聯  
隊入込、巡查千名モ入り海軍モ海岸ニ充滿ス  
ト三郎公ノ二子東京ニ登ラレシト

同十六日 晴

朝藤崎ト出町ノ湯ニ入○午後鹿子木ノ  
近傍中尾村ニ笠屨潜力寓居ヲ訪フ、甚  
辺鄙ニテ其不自由想像スヘシ、宇治茶ニ  
袋ヲ贈ル、詩ヲ賦シテ即事ヲ示ス

乱後相逢喜欲狂共談奔竄

客途忙携来両袖雙茶袋

留得君家喫緑香

同十七日 雨

閑散無事

同十八日 晴

池上村ニ馬ノ賃金六十目ヲ拂フ○小倉ニ騷乱  
アリトテ市村漸モ出張セシト云、実否ヲ知ラス

同十九日 晴

河豚ヲ求ム○川東ヨリ雜具ヲ取ル日雇一人四十目

同廿日 晴

通行鑑札ヲ戸長ニ請フ、且家屋破毀

ノ書附ヲ出ス○庄村長翁ヲ井芹村ニ訪

○近日大分縣廳ヲ薩ト縣士ト襲ヒ取ノ説アリ、不審

同廿一日 晴

泰造、第二大区小六区沼山津郷戸長ニ拜命ス

○予今日ヨリ風邪ニテ平臥ス○大分縣賊襲ハ

実説ナリ、賊五百名程急ニ来ツテ発砲シ、官員ヲ

縛シ金錢ヲ奪ヒ去ト云、一説ニ土州ノ縣令脱走シ

タリト、此挙ニ關係アルモ知ベカラス

同廿二日 晴

大里師匠来リ泊ル、建山所ニテ三弦ノ稽古アリ、師ニ二十錢ヲ贈ル

同廿三日 晴夜雨

家禄ノ渡リ方アリ、三十円許今日ヨリ政家全ク

泰造ニ譲ル○鹿兒島ノ官兵城中ニ在リ時々

縣士弓ニテ城中ヲ射ル、且琉球人投玉ヲ首ニ懸ケ

来リ、官兵ノ營ニ投ス、中レハ破裂ス、官兵頗ル

困苦ス、西郷ハ時々出没影迹ヲ顯ス、官兵其

西洋ニ奔ラン事ヲ恐ル○奥山静寂云、西洋人高

瀬ノ戰爭中見物ニ来リ、日本人ノ性根強ク幾

晝夜トナク死傷ヲモ不顧連戦スルニ舌ヲ卷イテ

恐ル、ト云

同二十四日 晴

河内ヨリ芳平来ル、納金来月中延期ヲ請

不破来ル

同廿五日 晴

官軍ハ矢部ノ濱町ニ在リテ追々賊ト戦フニ

昨今大ニ歩ヨク三台場ヲ乗取ト云、又一説ニ近

日死傷多ク、熊本ニ送リ来リ、或ハ首級ニハ官兵ノ

死尸ヲ送り致スト○今日ヨリ座シキノ床雨戸ヲ

作ル○笠婦潜来ル

同廿六日

新邸ニテ醉食ノ馳走アリ、近況第一ノ閑快ヲ

得タリ

同廿七日 晴

座敷ノ作事畢ル、今日ヨリ東京巡查ノ下宿  
ヲ請ク、人数八名一人一月四円也

同廿八日 晴

国友半ニ杉馬場ニ逢フ、原田十、池辺軍等二人  
吉ニテ逢フト雖モ三郎ニハ逢スト云

同廿九日 晴

植野カ病ヲ訪フ、小篠宗平モ来ル、余程ノ大病  
ニテ其快復ノ期覚束ナキヲ歎ス

同卅日 晴

植野ニ蒲焼鰻ヲ贈ル○東京日々新聞ヲ見ル

同卅一日 晴

田崎ニテ永屋ヲ訪ヒ、世安ニテ木村新ヲ尋問シ  
且謠ヲ諷フ

六月一日 晴微雷

新邸ニテ鯛ノ馳走アリ、且避乱中雜費ノ清  
算ス○下宿廿八日ヨリ三十一日迄四日分、一人五十一錢

六厘、合テ四円十三錢余ヲ請取ル

同二日 晴

朝市ニ行、其他無事○岡ハ落城ノ説アリ

同三日 晴

又風邪ニテ平臥ス

同四日 晴夜雷雨

今日モ平臥ス

同五日 雨

植野安氣ヲ訪フ、疾既ニ革ナラントス、予来  
レリト家人耳ニ俯シテ語レハ目ヲ張ツテ一視スル  
ノミ、夫ヨリ後ハ耳ニ入ルヤ否ヲ知ラス、是午前九  
時比ヨリ十一時比歸リ、午後四時再行テ訪フニ  
午後一時比己ニ卒シタリト云、嗚呼一人ノ良友  
ヲ滅却ス○小島長平ニ金廿円ヲ返弁  
ス、去年八月ノ債也、利金ハ暫延期ヲ請フ

同六日 雨午後晴

大分縣賊徒又襲来シ、東京巡查廿名警  
一名行衛不相分トノ説アリ○土州ハ郷衛隊ヲ

組立度トノ願書ヲ立志社ヨリ差出シ、専ラ  
民権論ナリ○内閣顧問木戸孝允去月廿  
六日卒去ノ由

同七日 晴

植野安氣ヲ妙永寺ニ葬ル、予是ニ会ス

同八日 雨

周雄来ツテ梅原弥平ヨリ正米会

社ノ社長タラン事ヲ予ニ請フト云

午後弥平来リ談判略定ル

同九日 晴

賊兵日々降参絶ヘス、皆言フ物ヲ喰セ

テ呉ヨト、又一説ニ賊ノ軍艦三艘来ツテ日

向沖ニテ海戦アリト、陸地ハ二三日置ニ砲声

聞ユル位テ、至テ平穩ナル由、白杵ヨリ来ル

人足ノ話也、各其好ム所ヲ説故ニ信セラレヌ事ノミ  
多シ

同十日 陰夕雨

津ノ浦鉄先カケ出来代一円十錢也○新聞

紙ヲ読ム、竹田ニテ賊敗走、緒方街道へ去ル、因テ

官軍竹田市中ヲ火ス

同十一日 雨入梅

賊軍今ヨリ十日ハ堪サル見込ト鹿兒島  
ヨリ報知アリト云、其糧食尽ルヲ以也

○今夜宿料十日迄一日ヨリノ内算用

九人ハ一円三十錢宛、一人ハ一円ヲ受取ル

同十二日 晴

於サミ、於タツ来リ三弦ノ謡ヘアリ○

今夕ヨリ下宿一人増ス、奥州二本松ノ人

柳

同十三日 晴

藤崎長ト牛島喜藏ニ至ル、午飯ヲ

出ス昼後都甲北川社至ル、同伴シテ所々

徘徊ス

同十四日

北岡社祭典アリ、参詣意外ニ盛也

能モ奉納アリ、○翁○高砂○田村○羽衣

融 祝言 ○末廣○悪太郎○彌宜山伏

○木村半平へ貸置ノ十円返弁アリ

利子ハ忘レタリト云、且半平頼ミニヨツテ  
田辺弥平ニ行、台兵ノ宿ヲ頼ム

同十五日 晴

杉谷来リ、今日高瀬ニ帰ルト云テ少々ニ  
去ル○宇野母病死ノ知セ来ル○藤崎  
牛嶋来ル○正木直来リ郵書ヲ受取ル

同十六日 晴

大里師匠来リ泊ス、今日稽古アリ○

同十七日 晴

熊本縣巡查五十名、人吉へ今朝出立、又  
大分縣へ工兵二隊朝昼二度ニ出立ス  
且今朝川尻方へ火事アリ、昨夜牧崎へ  
出火アリ、故ニ人心洶々再薩兵来ルノ説  
アリ、然ルニ人吉ハ戦争ノ巡查ニアラス、鎮  
撫ノ為ノヨシ、工兵モ大分ノ戦ヒ後修築  
ノ為ニ出タルト云、大分縣先日ノ戦争ニ賄所  
三ヶ賊ニ奪ハレタルユへ工兵ヲ出シタルト云

同十八日 晴 夕雷雨

牛嶋喜蔵ニ梅紫蘇ヲ贈ル、藤崎宅ニテ

都甲・堀井ニ会ス○義静ニ郵書ヲ出ス

同十九日 雨

薩ト当縣トノ降兵百五十人程今日着、迎  
町ニテ常蔵見ル、矢部方ヨリ送致スト云

同廿日 晴

今朝五時比松本茂吉、森田悦次兩名  
天草へ出發ス、松本ノ宿料ハ菊池請合ニテ  
延ベヲク○牧野警部補云、薩ノ降伏人昨  
日ト今日ニテ七百名着スト

同二十一日 晴

東京巡查中山鷹之助、吉利用敏、柳  
永助三名鹿児島縣出水出張ノ命アリ  
其子細ヲ聞クニ彼地漸々平定ニ付、警察  
ヲ置ル、由ナリ、二三日二丁沖ノ方ニ当リ砲声  
アリ、高橋詰ノ巡查ノ話ニ是ハ海軍ノ演習  
トノ事也、巷説ハ薩兵ノ熊本ニ近ツクノ説  
アレ共甚不審

同廿二日 夕微雷雨

朝飯後庄村長翁来リ、午後吉田

少来リ、夕藤崎長、牛島喜来ル○  
今朝中山已下ノ巡查三名発足ス

同廿三日 雨時々晴  
本妙寺参詣甚淋シ

同廿四日 雨又陰夜強風  
今日ノ薩ノ降伏夥シト云、其員数ヲ聞ズ  
其中ニ塩川成海モ有リト云

同廿五日 晴  
牧柴宅ニテ加藤儀一ニ逢フ○出町ニテ  
白晒木綿ヲ求ム、代九十目

同廿六日 雨  
無事○京都ノ郵書着ス

同廿七日 雨出水  
白川八幡洲ニ洪水ヲ見ニ行、七合  
程ノ水也、帰途鰻屋ニ寄ル、甚  
麤悪ナリ

同廿八日 陰時々雨

都甲、藤崎左平次来ル、午飯ヲ出ス  
加藤儀一来ル○構ノ青婆々死ス  
蓋シ昨日也○通行鑑札渡ル

同廿九日 晴  
夜九時比大砲一声牧崎辺ニ聞ク  
我ニ下宿ノ巡查三名探訪ニ出ツ

同卅日 晴  
井川作事ス、北川寛太より井門一式ヲ  
譲リ交代価、弥平見込六十錢(七月二日本価ヲ直)

七月一日 晴熱  
建町廣丁辺ニ行、道路修築アリ

同二日 晴  
今日ヨリ元構口番兵出ル○鹿兎  
島ハ人吉水保ト連絡ス、蓋六月廿七日  
也ト云、大分ノ賊勢未減ト云

同三日 晴熱甚  
避暑ノタメ山王川ニ行ク

同四日 晴

新邸ニテ三弦ノ稽古アリ○緒方  
幾四郎巡查拜命、明日ヨリ矢部ニ  
行ト云○武田寧来ル

同五日 晴

植野宅法事ニ行○東京巡查  
二百名鹿兒島行ニテ今夕出町  
着ト云

同六日 雨

朝市ニ行ク、且煙管差ヲ求ム、又傘ノ  
繕ヒ園田ニ頼ム

同七日 雨

藤崎宅ニテ牛島と会シ、午  
飯出ル○河内芳平弟来リ  
不納金ノ内五円ヲ納ル、仍而猶  
十二日迄ニ残金七十五円ヲ納ン事  
ヲ申遣

同八日 晴

藤崎弥三兄弟、松岡善五江

藤勝太尋薩ノ仙代川ニテ戦死

ストノ書面ヲ見タリト、牧相之語  
リシト云○近日家屋焼失之輩

江金円ヲ賜ル、上等百五十円以下  
数等アリ、寺原ハ三等位ニテ八拾  
円アリ、其内十円ハ先ニ渡リタル家  
代ニ御引立ニテ現手取七十円也、縣  
下一統意外ニ寡キト唱ヘテ巷説  
甚喧シ

同九日

藤崎親子カ戦死ハ確實ナル由、境  
野某カ話ト云○竹村・宇野・財津  
大江等ニ行ク

同十日

宿料七円八十錢受取○夕方  
藤崎ニ行瀨川小学校ニ住居  
スルヲ以暁ヲ贈ルノ心組アリ

同十一日 晴

無事

同十二日 時々強雨

白石来ル、国立銀行ノ許可ヲ三潤  
岩佐等力得タル話アリ

同十三日 晴

報恩寺ニ詣ツ

同十四日 熱九丁度晴

芳平来リ、納金七月中延期  
申出ルヲ許諾ス

同十五日 晴熱

法蓮寺ニ詣ツ○桑原玄周来ツテ  
都城陥ルノ話アリト云○夕山王ニ行

同十六日 晴

泰造へ五円ヲ渡、芳平納金也

○先日我ニ宿セシ松本・森田兩人  
出張向ニテ何カ事ハナカリシカ同勤中  
低語ノ様子ヲ下婢共洩聞タリト云

同十七日 晴

大里師匠来ル、三弦稽古有

○熊本縣士三十八名屠腹セシ由

東京巡查関根ガ見タルト云、不審

同十八日 雨午後晴

夜下馬橋辺ニ揚火ヲ見ニ行ク

同十九日 晴

池上藤右衛門家ニ預置シ三郎助ノ  
諸道具ト川東ノ品トヲ運ヒ取ル

同廿日 晴

天草出張ノ巡查、松本・森田ノ  
兩名歸り来ル○宿料七円八  
十錢受取

同廿一日 晴暁雷雨

桑崎新七納金ノ五百目、旧六月廿日  
迄延期依頼スト山内九平太十九日ニ来  
リ届クト云

同廿二日 晴

戦地へ行ク荷物夥敷門下ヲ  
通ル○三弦ケイコ有リ

同廿三日 雷雨

去ル十五日之状ニ都ノ城西三日ノ内  
多分可落城由、莊村一郎宿本  
へ申来ルト○山王川ニ釣ル

同廿四日 雷雨

日州霧島山ニ薩兵籠ルユヘ甚  
官軍ノ困難ト云、併官兵日々多勢ニ  
ナルト云○巡查松本話ニ天草ニ流戸漂着  
ス、定テ球磨川ヨリ来ルナルヘシ、面部腐  
敗シテ不分明、裁附ヲ佩キ結髪ナリシト

同廿五日 晴

漁ニ行キ、其品ヲ以客ノ巡查ニ出ス  
大賞味ス

同廿六日 晴

東京巡查署へ惣出、其内二名  
平常ノ衣装ニテ五丁立福寺辺ニ  
暮比ヨリ出ル、何カ事アリゲ也○久  
末流石翁ノ十七回忌ニテ香奠十銭  
ヲ供ス○薬札三十八銭、桑島ニ贈ル

同廿七日 晴

木下鰻屋ニ行、今日土用中牛ノ  
日也

同廿八日 夕雷雨

藤崎ト山王ニ行

同廿九日 夕雷雨

網漁ニ行○長須於タツ来ル

同三十日 夕立

無事

同卅一日 晴

寺原川漁ニ行○堀栄記話ニ  
豊後口薩軍甚強ク、官軍ノ本陣  
ヲ奪ヒ兵糧玉薬ヲ分捕シタリ仍テ  
官軍二里程退陣スト中山金ヨリ正ニ聞  
タル由、併日月ハ不分明

八月一日 晴

白髭社祭ニ行ク

同二日 晴

西森平次郎金五円ヲ納ル、去九年分之残五百目、当十年分ノ利子ノ内預置ノ証書ヲ与フ

同三日 晴

朝市ニ行

同四日 晴

因州鳥取縣人

東京巡査

西山辰蔵

但当時住赤阪新町氷川明神

裏

右是迄宿いたし候処明日東京へ発程

同五日 晴

日隅辺官軍大敗ノ説アリ、甚確ナリ、井芹石工村上某モ其節深手ニテ長崎へ送ラレシカ、定テ死タルヘシト云此敗績全ク薩ノ戸長ノ内通ヨリト云事ニテ此戸長ヲ残酷ノ誅戮ヲ加ヘタリト云○午前十時比出町ノ

方向ニ砲声聞フ、篤ト聞ニ津ノ浦ノ辺緒方某銃管ニ火発シテ大怪我ヲシタリ、其音也ト云○縊死ノ者松ヶ鼻ニテ見出ス、出町ノ者ト云

同六日 晴

昨日縊死一人又本妙寺辺ニアリ都合二人、昨日ノ緒方ハ誤リ、田島十蔵ニテ永田内蔵次事也

同七日 晴

無事

同八日 雨雷鳴

藤崎長来ル、酒飯ヲ出ス

同九日 雨微雷

朝市ニ行ク○加藤社元ノ地ニ造営縣庁ハ柳川丁元早川松ノ宅ニ出来ノ話アリ

同十日 雨夕晴

宿料九円十錢受取

同十一日 時々雨 △  
無事

同十二日 雷雨  
(※記載ナシ)

同十三日 夕雷雨  
近日大津鉄砲町辺ヨリ賊ニ随行セシ  
生山何某等三名、岩立村迄帰り之上自首  
セシ由

同十四日 晴  
山内・植野両姥来ル○菊七夕祭ニ付  
樽代十錢竹代五錢持参

同十五日 陰  
去ル十四日延岡落城ノ電信アリ、賊軍  
悉ク平定、戦塵休ト云、尤残賊豊後  
路ニ奔ル、梓嶺ノ賊ハ踪跡不相分、察スルニ  
延岡ト重岡トノ間十里距離ノ間ニ在ルヘシ  
ト樺山大佐ノ話ナル由

同十六日 晴  
無事

同十七日 晴 △  
長崎縣拘留ノ賊徒輕罪ノ分九十名  
程放免ニテ今日モ余計ニ帰宅セシト由  
歸縣ノ由追テ聞ユ

同十八日 晴或ハ微雨  
漁ニ行、久野ニ逢フ

同十九日 晴  
松岡尉助を雇フテ畑ヲ打シム、七錢  
五厘ノ賃也○池辺吉十郎脱走ニヨリ  
面體張出シ、十七日ニ出ルト云○兵隊  
余リ有ルヲ以テ別働旅団歸京スト  
新聞紙ニ有リ

同二十日 時々雨  
延岡落城ニ付残賊三百人程踪跡  
不相分、尤豊後日田へ向遁走スト云  
説アリ、降伏二千名計ニテ鎮台ニテ取  
扱ノ手数ニ困ル由

同廿一日 晴

今曉鹿婢脱走ス、衣装等自身ノ物

皆携去ル、因テ親元ニ問合スルニ無事

ニ在リ、則再ヒ帰宅ヲ申向ルト雖、明日有

無ヲ答フヘシト云、此件ニ付テ鹿ノ母より

常蔵迄申聞タル事アリ、鹿行蹟ヲド

ロク可事アリ、仍テ明日再ヒ人ヲ遣リテ

帰宅ノ相談ヲ取消ス筈ナリ

同廿二日 朝微雨夕晴

未明ヨリ漁ニ行ク○朝常蔵、伊作トヲ

川東村岩崎古平ニ預置長持ヲ取寄

且避乱ノ永々泰造共世話ニナリタル礼ト

鹿永々手全ニ勤メタル謝儀ト一貫五百

目ヲ贈ルニ豈圖ンヤ、昨夜九時比縊レ候

トコロ駈付卸シタル故、未呼吸ハ通ヒ候得共

額ニ大分ノ疵アツテ迎モ死亡可仕、若相果

候ハ、直ニ可申上ト手紙ヲ以申来ル、尤此

一死ハ不義発見ヲ恥テノ事由ナリ、相手ハ

越後高田縣士族東京二等巡查松本

茂吉ナル由、鹿ヨリ母江度々申聞セ候段

常蔵江母ヨリ泣々語り、且何方ニモ恨ナシ

只自分重畳ノ誤リト鹿繰返々々語り

タル由、仍其趣警部補牧野碓五郎ニ

申出ル、因ツテ直ニ署ニ出タリ、松本モ同道也

且此面々五月末ヨリ自宅ニ下宿セシ者ナリ○

今夜巡查下宿ヲ相断ニヨツテ惣引拂

同廿三日 晴

朝十時比出町妙教寺警視出張所ヨリ

自分并僕常蔵下女のふを呼ニ来ル、仍テ

巡查ノ迎ニ来ル者ト同道出署ノ処、鹿カ一件

ニ付テ調べ也、三人共同様早々書付ニテ差出候様

且戸主泰造モ罷出候様申渡有之候事、委細ハ

別紙ニ有リ○同刻鹿儀昨夜夜八時死亡ノ

段手紙ニテ知セ来ル

同廿四日 晴

今朝人遣シ泰造ニ此度鹿一件ヲ報ス

速刻歸り来署ニ出タリ、調べ直様済

松本茂吉今日免職保管トナル

同廿五日 晴

今日自身、泰造、常蔵、ノブ書付ヲ

分署ニ出ス○菊池来ル

同廿六日 雨大風

朝九時比ヨリ漸々風強リ木ヲ拔、屋  
ヲ破ル、一昨年ノ風ト同様、併二時間  
程ニテ次第第二風止ミ、十二時後天氣モ  
晴レ甚穩ナリ

同廿七日 晴

賊党与ノ遠坂為助、島弓削等  
降伏ノ由○林来ル

同廿八日 晴

今十時比岩崎夫婦、松田義之  
来ル、鹿葬式銀不足ニ付何卒  
少々心附被下候様申出候間、一貫五百目  
遣シ、此儀何之申分も無之段書付  
致サセ候事

同廿九日 晴

今朝周雄来リ、三郎七等赤尾口辺ノ  
人数十名降り、戦死脱走モ有リト  
実ニ近シ○藤崎へ行き津ノ浦ニ行ク  
○鹿事新聞紙ニ出ツ、且当十年一

月以後律條ノ内家祿取上ケヲ  
廢セラル、ト東京日々新聞ニアリ

同三十日 晴

佐藤、牧野来ル○芦村旧臣  
古閑何某戦地ヨリ帰ル、近傍  
ノ様子粗伝承ス、牧野云、一昨日  
賊ノ日州ノ支廳并警視分署  
等ニ襲来ス、役員只逃走スル  
ノミニテ抗低<sup>(マ)</sup>ノ人ナシト○三弦師来

同三十一日 晴

今曉泰造夫婦、於タツ新邸ニ  
行ク、左平次、周雄度々来リ今夜  
ヨリ寺原一家我邸ニ来ル、我新  
邸ニ移ル筈

九月一日 晴

朝七時ヨリ河内ニ行、途中炎熱甚シ  
十二時比河内着、芳平ハ軍夫ニ出テ不  
逢、仍テ用事不整、一泊シテ帰ル

同二日 晴

朝十時比ヨリ帰宅ス、今日モ炎氣昨日ノ如シ、鳥越ニテ午飯ヲ喫ス、伊倉ノ住奥村誓次ニ逢フ、書一封ヲ東弥次馬ニ贈ル今日ヨリ新邸ニ移住ス

同三日 晴

予去ル二日ヨリ新邸ニ住ス、爰元夕日斜ニ射テ炎威如熬煩熱ニ不堪、因ツテ山王川ニ行テ納涼ス

同四日 晴

夕方山王ニ行、今日稍涼シ○志方重助ニ山王ニ逢フ○熊本縣士護送ノ上入檻調へ中也、帰縣九十名余ノ内ニテ氏家二人藤本吉杉原芝貫角ノ名アリ○去ル二日比ヨリ出張ノ兵隊漸々引揚ニ成リ、熊本城中填塞ニテ川尻高橋蓮臺寺辺ノ近村ニ充満スト人夫ノ来集モ夥シク、物価モ從テ騰貴ス米二円二十五錢、鯛百目十二錢五厘○巨魁未滅訛言浮説街衢ニ横ル、甚シキニ至テハ又資財ヲ運転スルモノ有リ

同五日 時々微雨

建部<sup>タケ</sup>星合宅ニテ弦師草野某叔母ノ会アリ、於菊ガ出ルニヨリ見物ニ行、所々ノ師匠来集シテ甚賑合ヘリ、夜十一時帰邸

同六日 晴

夕方山王ニ行、漁ヲナス

同七日 晴

本宅ニ行キ午後周雄来ル、帰宅ノ話アリ

同八日 雨

朝飯後入湯ス

同九日 晴

津ノ浦ニ行キ夕方左平次同道、湯ニ入り又遊歩後牛店ニ入り一杯ヲ傾ケ、日暮赤尾口ニ左平次ハ行キ、予ハ新邸ニ帰ル

同十日 陰 辰ノ日

朝飯後湯ニ行、夕池亀村辺遊歩

同十一日 雨 午後晴  
朝入浴、夕山王辺遊歩

同十二日 陰

世安木村半平宅ニテ木綿商法アリ、是ニ行  
予取引事アツテ今村新吾、松井徳兵衛  
福之助ニ対話ス、彼より人力代半円ヲ贈ル○  
今日ヨリ内親王ノ御停止、三日

同十三日 雨夜雷鳴伸

朝入浴

同十四日 晴

朝入浴○岩崎古平、久保田某来ル、鹿ガ  
変死ニツイテ種々ノ欲心ヲ生シタルト見エ、仍テ  
其不都合ヲ説破ス、彼遂ニ要領ヲ得ズシ  
テ帰ル○左平次ヨリ狂歌ヲ贈リ来ル、就  
テ返歌ス

同十五日 晴

木綿商法ニ付入金いたし置、残り三円  
今村ヨリ受取、木村半平へ貸金之利

一円二十五錢受取、但乱後ノ今日ニ至リ能  
ヲサマリタルニ依テ甚快然

同十六日 晴

津ノ浦ニ行河豚ノ馳走アリ、夜ニ入テ帰ル

同十七日 晴

久本寺村長野信平より酒を求ム、廿四匁五分  
○白石ヲ訪フ、竹村来会帰途シビヲ求ム

同十八日 晴

橋谷一二へ手紙ヲ出シ岩崎古平カ非分ノ申  
分ヲ内達ス○山内又四郎公債証書ヲ  
下賜ノ有無ヲ問フニ未詳

同十九日 雨

今夕池永多七夫婦下女来夕餐  
ヲ出ス、蓋戦争中五十日程寄留シタルノ  
好ミヲ以饗応ス

同廿日 晴

左平次本宅ニ来リ、予モ行午餐ヲ出  
ス、夕方坪井辺徘徊、久野、三里、内田ニ逢

○今夜九時比緒方幸次郎門前ニ  
竹砲鳴ル、僕常蔵見物ニ行キ哨兵  
ニ咎メラレタレ共無事ニ帰ル事ヲ得タリ

同廿一日 晴

僕常蔵昨夜竹砲ノ懸リ合ニテ出町  
哨兵小屋ニ拘引セラル、予周雄ト哨兵  
小屋ニ行キ弁雪ス、仍テ午時比帰ル事  
ヲ得タリ○今日加藤宮還社ニ付キ夕  
刻参社ス○大里隼来ル、菊風邪

同廿二日 晴

塩屋町ニコフムリ傘ヲ頼ム

同廿三日 晴

三丁目辺徘徊○寺原彼岸、茶ノミ

同廿四日 雨

寺原漁ノ品披メ○

同廿五日 陰晴交

掲示云昨廿四日午前三時、各旅団鹿兒  
島城山へ進撃、賊魁西郷隆盛、桐野

利秋等ヲ打取、其他賊徒打死又ハ降伏シ、  
全ク平定候段鹿兒島縣權令ヨリ通知  
有之云々○古演武場ニ行キ酒ヲ求ム

同廿六日 晴

新邸彼岸ニ付茶ノミアリ、湯ニ浴シテ  
寛話ス

同廿七日 晴

迎町方徘徊、川尻口中程大和屋ト云  
紺屋江逗留ノ吉兵衛ナルモノニ一見シ、藍  
ヲ求ルノ約ヲナス○本庄白川端笠掃潜ガ  
寓居ヲ訪フ○菊池佐藤、新邸ニ来ル

同廿八日 晴

於初、寺原ニ来リ、新邸ニテハ本山ノ婆公  
ニ夕餐ヲ出ス

同廿九日 晴

寺原十三回ノ法事アリ○近日コレヲ病流行  
ニ付御布達アリ、出町ニテ人夫三人病ミ、二人  
死ス、構惠吉カ妻モ死ス、本妙寺内智運  
院ニ病院ヲ置カル、是第一二三大区ノ病イン也

同三十日 晴

微風邪ヲ得テ発汗ス、終日平臥ス

十月一日 陰

上田休平昨日縣庁ニテ斬罪ニ処セラル  
制札ノ大意、此者朝憲ヲ憚ラス西郷  
隆盛、池辺吉十郎等ノ逆意ヲ助ケ、榊  
原何某其外四名ヲ斬殺スル科ニヨリ  
斬罪申付ル者也

同二日 朝雨夕晴

夕方佐藤、菊池来り明日東京江出  
程ヲ告ク、仍テ半次郎へ書物ヲ届ン事ヲ  
頼ム、且夜出町ニ行キ別ヲ告、餞別ヲ贈ル  
松雲院町森田下宿ニモ行ク○夜諷フ

同三日 晴

池ノ上へ村五郎右衛門ニ葉藍ヲ頼ム、久野へ下り  
藍代三円ヲ贈ル○中路新之放免○緒方家搜  
アリト云、但夫門脱走シテ松橋ニ踪跡アルニ依ルト云

同四日 晴

世安村ニ行ク

同五日 晴

御墓ニ詣、帰途買物ヲナス、筒袖肌  
着ノキレニツ分求ム、代百三十二匁、二丈四尺  
○今日ダルマ忌ニテ茶ノミアリ

同六日 晴

今朝ヨリ於エツ虎列刺病ヲ引請ク、甚  
劇烈、朝七時比発シ直ニ絶脈并肢  
コワリ爪ノ色紫色トナル、兼テ儲ケ置トコロ  
ノ葉鳥謙良水薬ヲ用ヒ、手足ホカラシ湯  
ニテ温メ徳利ニ湯ヲ入、腹ヲアタ、メ直綿ニテ  
背腹ヲ卷キナトスルニ四時間計ニテ少々宛  
温氣ヲ発シ、脈出ツ、夕方桑島来リ弥  
生路ニツクノ話アリ、実ニ危ノ極ナリシカ  
幸ニ諸薬品兼テ相備リ、看病ノ行届  
タル計ニテ一命ヲ拾ヒ得タルト云ベシ○緒  
方加エ門屠腹ノ説アリ、外ニ一名アリト云

同七日 晴

山内直彦徴兵明年適當ノ書付ヲ

認ム、八代八十二大区六小区鏡町之野津郷

同八日 晴

豊後地方ニテ降伏ノ池辺源太郎放免ニテ  
今日帰宅ス、三郎七ノ所在等モ如何成行  
タルヤモ不分明、全ク降伏ノ場所異ナル故  
ナルヘシ、池辺軍次モ明日帰ル由○直彦  
徴兵ノ書付ヲ相達ス

同九日 陰時々微雨

戸長詰所ヨリ呼ニ来ル、云、直彦育ノ身分  
ナレハ兵役ハ相当ノ任ナリ、戸主ニハ母カ妹ヲ立  
ツル順ト云ヘシ、因テ免役願ハ返却スト○池辺  
軍次帰ル

同十日 雨

コレヲ病流行甚シ、日雇頭常蔵死ス、桑  
島三十人ノ病人ヲ受持、内七人死ス、謙良発明  
ノ薬アリテ能功験アリ、因テ新聞紙ニ出スト云

同十一日 陰

坪井方遊歩、田久保、稲田ニ逢フ

同十二日 晴

山王辺遊歩、兵隊ノ二名ト井芹村十七  
ノ女子ト鶴ノ山ニテ輪淫相楽ノ話ヲ聞ク  
女児名ハ八百、有名ノ淫婦ト云○今夕胸痛  
甚シク、夜尤煩鬱殆発狂ノ情緒ノ如シ

同十三日 晴

白川町裏ニテ田久保、東崎ヲ訪フ、午飯ヲ  
出ス○今夕頗ル快爽ヲ覚フ○益田  
源七延岡ニテ薩ト順逆ノ論不合、又賢札  
ノ事ヲ論シ不屈シテ殺サルト云

同十四日 晴

今日ヨリ十六日迄山崎練兵場ニテ鎮台ノ招魂  
祭アリ、児女輩ヲ伴ヒ行ク、競馬軽業手踊り  
等アリ、甚雑踏、祭儀者生牛数頭餅酒等  
山ノ如積、旌旗風ニ翻ル、戦死ノ家族等参拜  
スレハ酒并折詰ヲ下サル、様子也○古町方ニテ  
反物ヲ求、菊羽織代三円、帰途廣丁鱧  
屋ニテ夜食ヲナス、上下四人

同十五日 陰夜雨

池上村祭ニ行、池永多平并藤右衛門宅ニテ

鱧ト赤飯等ヲ出ス

同十六日 晴

今夕招魂祭見物ニ行、飾リ馬相撲踊リ  
揚火等アリ、揚火ハ縣士余田三杯ノ作ル処  
ニテ尤能ク出来タリ

同十七日 晴

泰雲院様御征月日ニ付参拝、午時寺原  
新邸等打寄、茶ノミアリ

同十八日 雨

池辺吉十郎本月十日延岡地方ニテ就縛  
ノ揭示出タリ○山内直彦カ郵書着

同十九日 晴

山内直彦病氣ノ段戸長へ達、戸長  
宅江来リ、且山内家戸主ヲ立へキ旨  
達シ来ル○夕坪井方遊歩○菊三  
弦ノ会ニ出ル、三浦宅ナリ

同廿日 陰夕雨

出町辺遊歩、午後藤崎宅ニ行

宮部四郎来リ、三郎七ガ話アリ、是  
必ス二塚ニ関係シテ看病スルナラント云、  
夜九時比俄ニ三郎七帰宅ノ報アリ、  
因ツテ新邸ヨリ本宅ニ歸リ、久々ニ  
対面ス

○家族名録

避乱、池亀村用掛 吉田如雪

池永多七宅ニ五十日 旧年六十一

逗留ス

同 成海田鶴 旧年五十五

同 吉田菊 旧年十三

避乱川東村岩崎吉平 吉田泰造

或ハ大津森本紫鹿宅ニ 旧年三十七  
アリ

同 吉田鶴雄 森本伊津

旧年十 同廿七

同 吉田加多

旧年三

東京司法省法律

吉田義静

学校ニアリ

同二十四

西京英語学校ニアリ

吉田作弥

同十九

薩ニ党与シテ脱走ス

吉田三郎七

同五十六

池亀村兄ノ許ニアリ

池上知茂

同三十三

川東村親ノ許アリ

岩崎志加

同三十三

池亀村用掛宅ニ陪従ス

堀尾常蔵

同二十九

川東村大津ニ陪従ス

萩原濃富

同十九

初メ旧宅ニ留ツテ児

産スト見ヘタリ日

○猫

由幾

数廿日ヲ経テ池亀村ニ携ヘ帰ル

雜詠 笠帰着、植野安両人來り過

四隣翳鬱不見家深鎖柴門遠世譚

色定風塵天地外新陰迎友烹新茶

畏熱

畏熱情深於賊軍趨風投冷業甚勤泰

西撰養須氷雪六月炎天凍齒斷